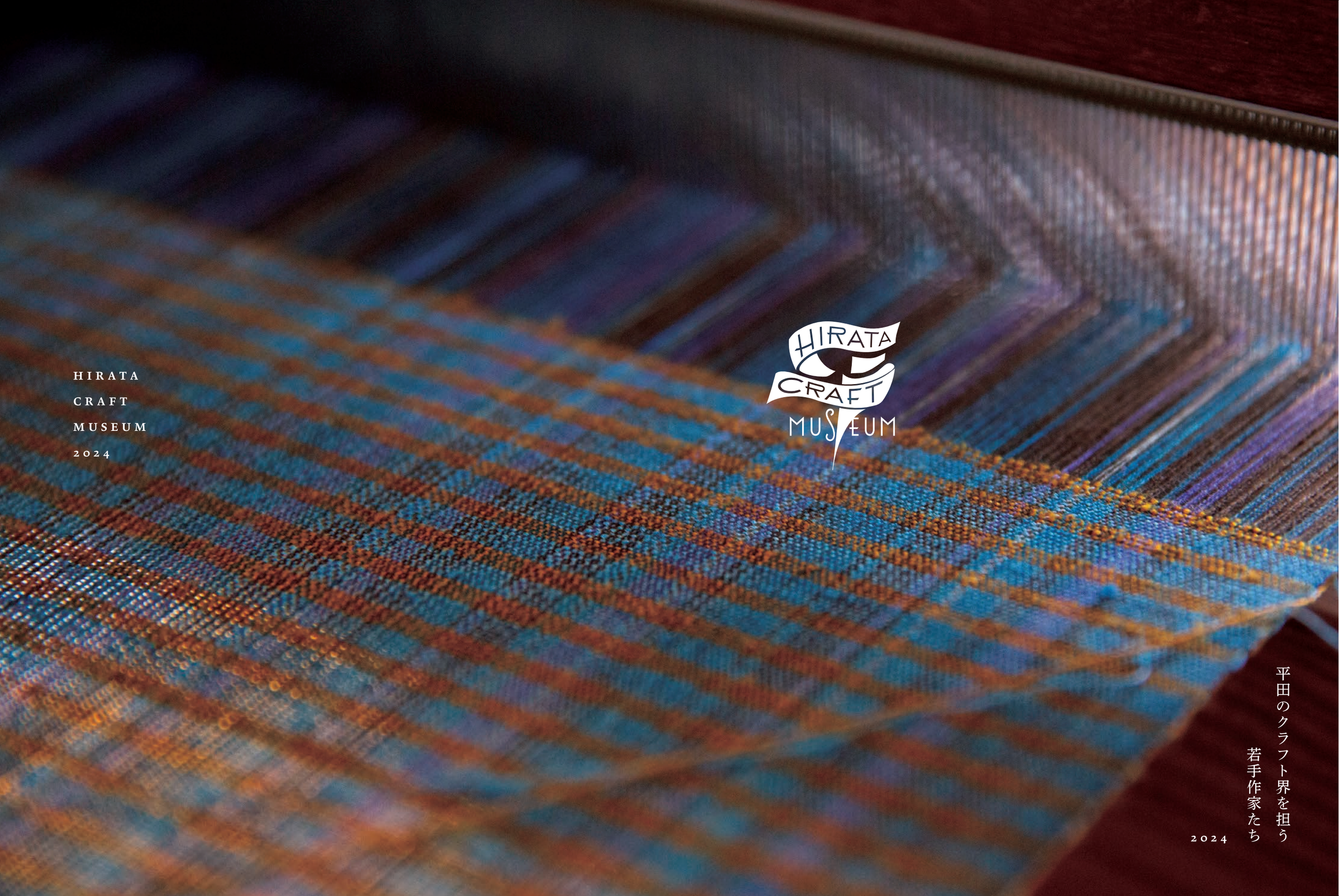


HIRATA
CRAFT
MUSEUM
2024

平田のクラフト界を担う若手作家たち

2024

かつて木綿の一大生産地であり
水陸交通の要衝として栄えた雲州平田地域。
この地に縁をもつ多彩なジャンルの若手クラフト作家12名。
枠にとらわれない創造性に富んだ手仕事を通して
今を生きるクラフト作家たちの表現と思考に触れ
ものづくりの現在地を見つめます。

雲州平田、表現するクラフト。

HIRATA CRAFT MUSEUM

吾郷直紀　製本・紙　05
吾郷屋　at 平田町（平田町出身）

ヒノタケシ　指物・空間　09
Bench Work Tatenui　at 平田町（平田町出身）

石川　哲　金属工芸　13
金属立体造形工房クラフトキャリア　at 平田町

岩佐昌昭　陶　芸　17
at 西郷町

田部井眞子　デザイン・テキスタイル　23
ミツトリヒトギ　at 多久谷町

安食　潤　陶　芸　27
at 口宇賀町（口宇賀町出身）

樋野由紀子　染　織　31
at 十六島町

原　隆介　家　具　35
RYUNOSU furniture　at 平田町

伊藤大介　革・帆布　41
hibi　at 松江市八雲町（野郷町出身）

かわなべかおり　ガラス　45
ガラス工房 Izumo　at 斐川町出西（平田町出身）

川邉雅規　ガラス　49
ガラス工房 Izumo　at 斐川町出西（平田町在住）

久家明子　革・靴　53
grandpa YOSHIO/久家靴店　at 平田町（平田町出身）

平田に作家が集まる理由は？　57
編集後記　58

location: Bench Work Tatenui　photo：Kazue Kawase
text:Yutaka Fujihara & Yoko Yasuda

吾郷直紀

Naoki Ago

製本・紙

吾郷屋
at平田町（平田町出身）

あごう・なおき／1979年、出雲市平田町生まれ。香川大学法学部卒業後、地元で一般企業に就職。2007年よりサラリーマンの傍ら「吾郷屋」として独学で手製本の活動を開始し、2017年「手製本・紙の造形 吾郷屋」として独立、実店舗を平田・木綿街道にオープンする。ノートなどの造本から装丁、デザインまで、紙の造形もすべて手作業で制作する。紙の切り抜きによるモザイクやおっさんのシリーズ、嵌め込みによるノートなど、紙の可能性を独創的な発想で切り拓く。

頭に浮かんじゃったら
形にしないと気が済まない

「工作が好きで菓子箱を分解し、車やロボットなどをつくっていました」。幼少期からアイディアを形にするのが好きだった吾郷さん。初めての製本はホッチキスで紙を綴じた昆虫図鑑。小学校の頃には自由帳に漫画を描き出したが、描いた漫画が2～3冊貯まると表紙を剥き糊で連結させ、「一巻」と書いて単行本にしていた。工作も好きで、鋼材をグラインダーで削ったり、木を彫り釘や鎖を付け、ゲームに出てくる武器のようなものをつくって遊んでいた。「ちょっと変わったものを友達とつくっていました。高校生になると、友達と自作漫画を描いていました」。

家が習字教室を開いており、書の世界にも触れることがあった。「書は黒い部分と白い部分の間合いがデザインと近いものがあり、今に活かされていると思います」。

高校卒業後は香川大学法学部に進学。しかし法律関係の職に就きたい訳ではなかった。「法律に興味はあり、生活の知識として学ぶといいかなという感じで」。大学では美術部に所属。油彩をする部員がほとんどの中、友人と一緒に紙粘土でつくった人体をビニールに閉じ込めたアート作品やプラ板を加工して小さな椅子を制作していた。「アート作品以外にも帆布の鞄を見よう見まねで縫製したり。なんであんなものつくったんだろうっていうものばかり。若いっていいんですよね」。

就活の時、大学で学んだことを仕事にするか、ものづくりの道へ進むか葛藤があった。「いろんな気持ちがぶつかり合ったんですよね」。悩んだ末、卒業後は地元に戻り、サラリーマンの道を選び、総務経理を10年以上務めた。最初の頃は忙しくものづくりから離れたが、仕事に慣れ時間ができると、友人と漫画コンペに応募したりしていた。「何の返答もありませんでしたが（笑）。ただ、自分のやりたいことは漫画じゃないんだろうなと思ってはいました。そもそも絵や字を描くのが好きで、大学ノートに描くよりは、自分でハードカバーの本をつくって描いたら面白いだろうなと思い、一度つくってみたら製本の奥深さを感じ、もっとつくりたくなったんですよね。ノートや本をつくるきっかけになりました」。

出会いは突然に

手製本をやりたいと思っても、地元の本屋や図書館では参考になる書籍は見つからず、海外サイトを含めたインターネットの情報頼りだった。ある時、「DOOR book store」（松江市）で「美篶堂（みすずどう）」（長野県）のノートと手製本のつくり方の本を見つけた。「僕はとことん調べないと納得がいかない性格。作品のノートを穴のあくほど見て、つくり方の本を読み込み、伊那の工場にも行きました。ただ美篶堂さんのノートの背中は無線綴じで、糸綴じがしたかった僕はいらなくなった本を分解し、どういう構造で製本されているかも調べたりもしていました。やっぱり本を綴じることが好きなんですよね」。

2008年に「松江イングリッシュガーデン」で開かれていたアート展を、後に妻となる桂子さんと見に行った時に陶芸家の石橋

優さんと出会った。「作品が面白くていろいろ話をしたんです」。その時、桂子さんが石橋さんのカップを友人の結婚祝いにしたいと買おうとしたが1個しかなかったため、「次の個展までにつくるのでぜひ来てください」と誘われたという。「これが僕の人生がおかしくなった全てのきっかけです(笑)」。

石橋さんにノート作品を見てもらおうと目論み、個展に訪れ予約したカップを手にした後で「実は僕もこういうノートをつくっているんです」とノートを差し出した。「そしたら『これ、すごいですね!秋に作家2人で展示会をする予定なんですけど、あと1人欲しくて、どうですか?』と誘われたんです」。二つ返事で「やります!」と答えた。2008年10月、鳥取県米子市の「青杏+」で開催した石橋さん、作家の大森みず紀さんとの「さんにんてん」が、作家として初の展示会となった。初の展示会は学ぶことだらけ。「どれくらい売れたとかいう次元ではなく、こんな世界があるんだなという感じでした」。その後、石橋さんとのつながりでいろんな作家との出会いがあり、様々なグループ展に参加するようになった。

DOOR book storeで開かれた石橋さんの個展に行った際、ノートを店主の高橋香苗さんに見てもらったことがきっかけで2010年に初個展を開くことになる。「新聞を別の物に見立てて貼り絵をするシリーズのノートでしたが、手製本であることも伝わり盛り上がりました。香苗さんとの出会いも転機として絶対に外せないんですよね」。

2010年に高橋さんの呼びかけで「ひびきあうもの」がスタート、2012年には「若手作家展」(のちの「ステップ展」(2013年)、「丘のクラフト展」(2014年〜)の前身)が立ち上がり、自宅のある平田の「木綿街道」も賑わいつつあった。「この頃、現在も参加する展示会やギャラリーがたくさんでき、刺激を受ける作家仲間がすごく増え、もっと作品に磨きをかけたいというスイッチが一気に入った気がしました」。複合的な出来事が重なり、独立を決意。「サラリーマンと並行ではどうしても時間がないし、お金のことを考えたら何も始まらないだろうと思って。人生一回きりだから、やりたいことをやろうと思い独立しました」。開業にあたり自宅屋根裏を作業場に、屋内駐車場を実店舗に改装し、2017年「手製本・紙の造形 吾郷屋」として独立開業した。

感知できない感覚を表現に

はじまりは手製のノートだったが、創作の幅はどんどん広がっていった。「紙の嵌(は)め込み」は代表的なものの一つ。重ねた紙を切り抜いて互い違いに嵌め変えたり、別で切った紙を嵌め込んだりしてデザインを表現する。「例えば印刷だったら劣化し退色するが、嵌め込みだったら消えないし、紙に描いた絵や印刷物とは違った景色が見えるんじゃないかと思ったんです。人があんまり感知できないものとか、何かを感じてしまうような違和感を大事にしています」。時にクスっとするような独特の違和感は、「新聞紙の貼り絵」、「紙の切り抜き」、「可動式紙人形のおっさん」など、作品の随所に現れている。

網目状のドットを嵌め込みで表現した「モザイク」は、2010年頃に始めたシリーズだが、2019年頃にはドットのサイズを2㎜から1㎜に縮小した。「コンマ何ミリの次元で微妙に大きさが違ってくるのが、眼鏡を外して見た時に肉眼で分かっちゃうんです。だから人間が感知できない感覚が表現できているんじゃないかと、ぞわぞわしてくるんですよね。モザイクシリーズは自分の一部を感じる重要な作品です」。

昆虫や植物をモチーフにした作品も多い。「単純に僕は虫が好きで、虫を見ると感動します。虫は完璧な造形で自然に逆らわず生きており、その姿への憧れや敬意が出てるんじゃないかな。庭の蔦など植物の強い生命力にも惹かれます」。

アイディアはどんどん湧き上がるという。「さあアイディアを考えるぞ、そのために散歩してみるぞ、ということはないです。常にアイディアの源泉みたいなものがポコポコと出ている状態で、それを貯めておき、それらを体系づけてみたり、それをもとに作品をつくるっていうこともあります。でも微塵でも変だと思ったら絶対にやらない。手にする人に失礼だと思うから、それはやめるようにしています」。

手にした人とつくる手製本

手製本ノートは手にした人が書き込んで完成だという。「きれいに使う方やハードに使い込む方、いろんな方がおられますが、その人だけの表情がノートに出てくるんです。ノートで一番大事なものは書いてある〈情報〉。書き込むことで自分だけの作品になるという点ではアート的ともとれる。物質感があり、〈手でめくり情報が見える〉というところが、魅力なんじゃないかと思うんですよね」。

最後に大切にしていることを聞いてみた。「自分に嘘をつかないことですね。自分の心の声に常に耳を澄まして、自分が表現したいものを常につくっていきたいです。今こうして生きて進んでいけるのは本当にありがたいこと。周りにいる人や周りにある道具や紙とかがあっての私ですから。感謝しています」。

ヒノタケシ

Takeshi Hino

指物・空間

Bench Work Tatenui
at平田町（平田町出身）

ひの・たけし／1977年、出雲市平田町生まれ。愛媛大学農学部生物資源学科を卒業後、実家の花卉生産農家の手伝いなどを経て、2003年に一念発起して京都府立福知山高等技術専門校家具工芸科へ入学。2005年より指物工房矢澤（宮崎）、2008年からは井口木工所（京都）で修業する。2011年西陣で独立し「一〇八（chaju）」を創設する。2017年出雲に移転して「Bench Work Tatenui」を設立し、ベンチ専門アトリエをスタートする。京指物の魅力を今の生活様式に落とし込むことを軸に作品を制作する。

興味があったのは自然の数理
「ものづくり」からアプローチ

「超合金ロボットを組み立てるのが好きで、そこからプラモデルをつくるように」。プラモデルやラジコン、ミニ四駆など、つくることが好きだった幼少期のヒノさん。完成すると興味はゼロ。アレンジや改造には関心がなかった。中学生からプログラミングにのめり込みゲームをつくっていた。しかし、家族の反対もあり、ゲームクリエイターへの道は断念したという。

ヒノさんの実家は花卉（かき）生産農家。胡蝶蘭を使った研究に触れる機会があったことから遺伝子組み換えやクローン技術に興味があり、バイオテクノロジーを学ぼうと、愛媛大学農学部生物資源学科に進学。社会的に環境保全への意識が高まる中、ゴミ問題や環境保全、生態系に対するアプローチを研究した。この頃から環境負荷や生態系のバランスが関心事。現在のトレーサビリティの考え方につながっている。

大学卒業後、家業を考え研究職ではなく、ガーデンデザイナーを志し、愛媛県で生花店に就職。英国の「キューガーデン」（キュー王立植物館）の研究機関で勉強をしつつ庭の管理を仕事にすれば体系的に学べるのではと考え渡英したが、想像したものとは違っていた。「僕はもともとインテリアが好きで、インテリアとしての『内から見た庭』、つまり内から拡張されていったものとして考えていたと気づき、『外から見られる庭』と考えた時、いわゆるエクステリアに対する自分の熱量に懐疑的になりました」。帰国後、生花店を退職。「しばらく愛媛にいたけど、実家を継いで花をやれば、自分の中で分かるものがあると考え、島根へ帰る決断をしました」。

帰郷後、花卉生産を手伝っていたが、流通のことも知るべきと、島根県の農業者支援プログラムを利用し大阪の市場に約1年間研修に行くことに。「でも大阪って情報も多くいろんなところに行けるでしょ。休日とかにいろんなショップを回っていたら、花の勉強しに大阪きたのに、インテリアへの興味が再び湧き上がってしまって（笑）」。伝統的なものも見たいと、「京都伝統産業ふれあい館」（現・京都伝統産業ミュージアム）に行った時、その地下に展示されていた京指物（きょうさしもの）に心を奪われた。「今まで見てきたデザインや、流行の家具の雰囲気とは全然違い、トラディショナルだけどアンティークでなく、〈今〉つくったものがここにある。その佇まい、繊細さが魅力的で、僕もつくってみたいって思ったんです」。

京指物との出会いでものづくりへの興味が強くなり、その職人に会いに行き「『僕もこういうものをつくりたい。どうしたらいいでしょうか？』と相談しました。その時点で花を継ぐ気がなくなってますよね（笑）。そうしたら井口さん（井口木工所・代表 井口彰夫氏）が、『京指物は斜陽産業で需要も減り儲からないから、もう少し考えたら』と木工技術の古い本を貸してくれました。それで諦めさせようとしたんでしょうけど、逆にどんどん興味が湧いてきて」。研修が終わり帰郷前にもう一度「やりたいです」と直談判したが断られ島根に帰ったが、ものづくりへの興味は冷めず再び京都へ。「京都へ来ました。井口さんの元でどうにか学べないでしょうか？」と相談した。井口さんの元に入り込めなければ、京都の伝統工芸の専門校に行く腹積りだったが、井口さんから「木も触ったことがないのでは何もできないし、この時代、手作業だけを学んでも機械が使えないのでは話にならない」と、機械作業も一通り学べる福知山の訓練校を勧められた。資金を貯め、2003年、京都府立福知山高等技術専門校家具工芸科に入学した。

1年後、「訓練校が終わります。入れてもらえませんか？」と井口さんに直談判するも、「経験がない者を雇う余裕はない」と断られた。京都の木工所に一旦入社したが、近代的な工法の仕事が多く、このままでは京指物に近づけないと1年経たずに退職し、弟子募集があった宮崎県の「指物工房矢澤」（代表 矢澤金太郎氏）に応募した。「3年の修業は絶対、それ以降は自由というスタンスの工房。薄給で制約もあったけど、終業後は工房の機械を自由に使えるというよい環境でした。矢澤さんは漆仕

上げの創作家具をつくる、京指物とはいわば対極の作家ですが、直に学べて良かったです」。

3年の修業を終え再び京都へ。「そろそろどうでしょうか?」と、井口さんに何度目かの直談判をした。「もうしょうがないな」と弟子入りが決まった。こうして念願の京指物の世界に飛び込んだ。「宮崎の時は1〜2種類の材種で同じものを量産することが多かったけど、京都ではいきなりフワっとしたイメージや図面を渡され、全部自分で一から考え、加工していかないといけない。数はつくらないので毎回違うものをつくるし、材料も少ないので絶対に失敗できない。親方に怒られたことは一度もないけど、指導にあたった職人さんにはよく怒られていました」。工房は17時終業。残業はなく時間内に全て終えることが絶対だった。「それじゃ足りない」と一軒家を借り、土間に木工機械を置き、自宅にも作業できる環境を整えた。「仕事でできないことを試したり、自主制作をしていく中でやりたいことが増えてきました」。

弟子入り前から独立は視野に入れており、親方にも相談していた。将来的な両親の介護のことも考え、継ぎはしないが最終的には島根に帰るというのは心に決めていたという。独立を決心し親方に相談に言くと、「それ相談か?決めとんやったらやったらいいんじゃないか」と言われ、退職が決まった。しかし顧客がいない状態ですぐに島根に帰るのは危険と判断し、帰郷後を見据え、京都西陣を拠点に関西での基盤を固めることにした。

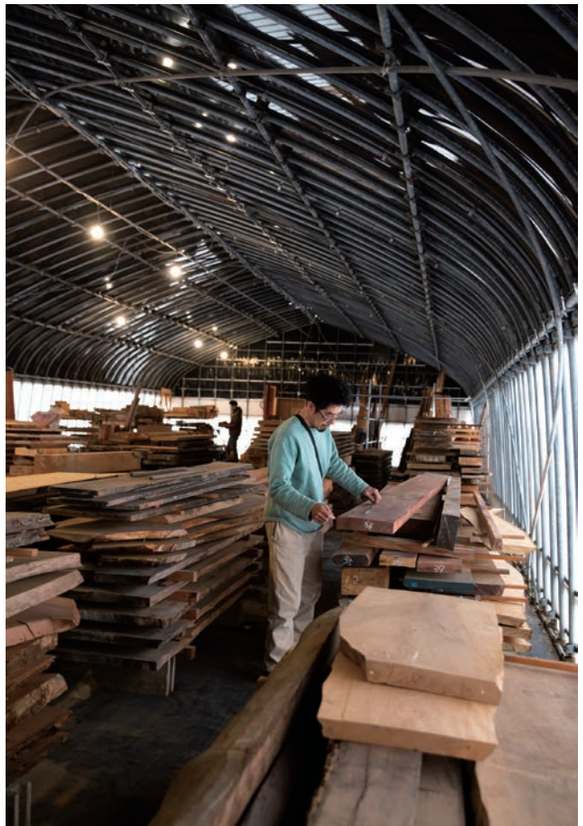
京都の町屋が教えてくれる

2011年、「一〇八(chaju)」を創設。西陣織の工房跡をリノベーションした。暮らしの延長線上で生業としてのものづくりが直に見えるよう入口に店舗、その奥に縫製をしている妻の工房、さらに奥に木工作業の工房を設置した。「京都は古い建物も多く、リペアしながら大切にされたからこそ残っているものがたくさんあって。家具は暮らしの中の一部。僕は古民家の中でつくることで、時代を超えていくものの空気感を直に感じられるといいなと考えていました」。

オーダーを受けたり、展示会を開いたりと店は順調で、島根に帰るのはもう少し先と思っていたが、「帰るなら何にしても早く帰ってやったほうがいいんちゃう」と妻に背中を押され、2015年くらいから工房移転に向け動き出した。ちょうどその頃、親戚の家に伐りどきの木があり、その木で「家を建てたらどうか」という話が挙がり、京都と島根を行き来しながら建設への準備を進め、2017年平田町の国道沿いにギャラリーが誕生。屋号を「Bench Work Tatenui」に変更した。「僕が何が好きで、何に興味があり、どうしたいかと考えた時に、今まで一番多くつくったものは『ベンチ』だった。同じ板の上に載って一緒に空間を共有する。そういったベンチには可能性があるんじゃないかって思えたので」。所在地の旧地名「楯縫郡」からとって「Tatenui」を付け加えた。定期的にオープンデーやイベントをしていたが、コロナ禍以降は車で1分ほどの作業場をメインにした。京都でもしていたものづくり体験教室を「クリエイトクラス」として不定期で開催している。

空間を構成するもの

日照時間が少ない出雲では、屋内が明るくない印象があったというヒノさん。京都も気候は異なるが、長屋や古民家は全体的にほの暗いという。「そういった環境での形の捉え方は、空間に存在するものがつくり出す影が影響するのではと思います。だから影の出来方に僕はとても気を遣います。出雲で生きてきたルーツと、京都で学んだ技術と文化的なルーツが重なり、僕の中でひとつのまとまりとしてあるんじゃないかな」。



陰影の他に、設計をする際は様々な事象が許容される余白のあるデザインを意識しているという。「例えばベンチも1人で使ってもいいし、何人かで入れるんだったら入ってもいい。そこに何かしらのアクションが生まれるかもしれない。固定されるべきものはありつつ、他のものを受け入れることのできる空間をつくりたいとは思っています」。

木材は天然乾燥材を選んでいる。人工乾燥は、水分量が少なく収縮も少なくなる反面、人工的に乾燥させるので過乾燥になったり、様々な要因で細胞が変質したり、樹脂や成分の発散量や香りも少なくなっている。一方、天然乾燥は時間をかけて徐々に乾燥させるため、水分量も多く、環境によっては膨らんだり縮んだりの変化が大きい。「リスクもあるけど、香りとか手触りがそのままの表情で残るから、僕は天然乾燥材派。木材トレーサビリティを確保し、その木の出どころや過程がわかる天然乾燥材をできるだけ選んでいます。その木の育った場所や地域のストーリーがわかることで、例えばその環境に想像を広げたり、つながりを感じてもらえたり、そういうのって大事だなと思います」。

見たことのないものを形にしたい

最後に、今後どのような活動をしていきたいか聞いてみた。「現時点で言えば、素直に自分の中から湧き出てきたものを形にして、それ自体が〈作品〉という形式にシフトしていきたいと考えています。もちろん今までつくったものも全てにストーリーがあり、オーダーの一点ものも作品と言えますが、そこには制約も当然ある。制約なくひとつの作品に取り組み、もっと自分の気持ちやあるべき姿を素直に出すようなものをつくっていきたいです」。それに対し評価があろうがなかろうが「表現してみないと分からないことがある」と言い、まずはそこに力を入れていきたいという。「『これって面白いんじゃない』みたいなものを形にする。それは最初から変わらないし、年月が経ってもたぶん変わらないところです。そして、僕の一番の原動力は究極的に『自分が見たことのないものを見たい』というところなんですよ」。

石川 哲

Akira Ishikawa

金属工芸

金属立体造形工房クラフトキャリア
at平田町

いしかわ・あきら／1972年、鳥取県米子市生まれ。島根大学教育学部美術研究室で高橋正訓に師事し、伝統的金属工芸・鍛金技法を学ぶ。同大学院を修了後、鉄工所で金属加工機械の扱いを習得し2004年「金属立体造形工房クラフトキャリア」として独立。大田市、米子市と工房を移して、2021年から出雲市平田町の工場跡に工房移転。2023年には工房2階に「ガレリア ポルタエリ」(展示室)を開設。鍛冶技術と機械による加工を融合させ、金属の性質を理解し魅力を引き出す作品を創作する。

仕掛けにこだわりを
尖っていたアート時代

「落ち着きのない子でしたが、プラモデルにはハマり、一日中黙々とつくっていた記憶があります」。親の転勤で広島市で育った幼少期。やんちゃな子に囲まれ好き放題やっていたが、小学4年の時に米子市に転校すると、そういう子がクラスには全くおらず不安に駆られ、逆に大人しくなった。「良くも悪くも常識的な感覚が芽生え、二面性が生まれた気がします」。

中学時代の得意教科は技術。真鍮製蒸気機関車の模型やからくり玩具の構造を理解し、仕掛けにこだわって制作していたところを先生に褒められ、自信につながった。「その頃から『仕掛けもの』が好きだったのかもしれないですね」。

大学浪人中、美術と技術が自分の好きだった教科だと気がつき、「この気持ちを大切にした方がいいんじゃないか」とデッサンなどを猛特訓。島根大学教育学部(美術)に合格した。

入学後、工芸の授業で数学的な法則や思考をベースにする構成課題に興味を抱く。また一方で、教官の高橋正訓氏の金属工芸作品の放つ素材のパワーに圧倒された。2年時、鍛金の授業で上手くいかず、授業外にコツコツと励んでいたら、高橋先生に「工芸にはしつこさも必要だから、君向いてるかもね」と言われた。「器用ではないけど〈しつこい〉僕の性格を見抜かれ、これを機に工芸専攻となる高橋研究室に入りました。そして早いうちから卒業制作について考えるよう言われたんです」。石川さんの卒業制作は他の学生より早く始まった。鍛金の薄く軽くできる特性に着目し、西洋甲冑にヒントを得た自身の姿を模した被り物を考案した。着脱交換可能な喜怒哀楽を表現をした4枚のお面を錠前で固定し、その鍵をピアスのように耳に掛ける仕掛け。テーマが決まると制作が始まった。「直径が大きな地金を用いたので、体全体を使って叩いた経験はすごく大きかったです。対称性を出すために左手で叩くこともあったり。あれだけの設備を使い、完全に自分の世界に没頭できたのは貴重な時間でした」。完成作品に手応えを感じ、作品としてもっと発展させたいと同大学の大学院に進んだ。

大学院では、ハンドルを回すと音が鳴るオルゴールのような仕掛けを仕込んだ被り物へと進化した。「試作版でギアの回転数や比率を計算して、ギアボックスを設計しました。また、仕上げの工程で銅錆を薬品で付ける緑青(ろくしょう)付けを初めて試み、何年もかかる錆が一瞬でできるという伝統工芸技術にも興味を持ちました」。鍛金の被り物作品《ラクオ》が誕生した。

大学院修了後、《ラクオ》を渋谷パルコ主催の公募展「アーバナート展」に出品したいと上京。「アパートから被って電車に乗り、『渋谷の搬入会場まで作品が歩いてやってきた』という映像を友人に手伝ってもらって撮影したりしました。アーバナート展は何でもありな美術コンペで、会場では狙ったとおり大ウケでした(笑)」。賞には至らなかったが、入選代表として表彰された。展示終了後すぐ、当時放送されていた「たけしの誰でもピカソ」から出演オファーされ、一般参加の「アートバトラー」としてテレビ出演を果たす。「アートで生きていきたいと思ったのですが、僕の作品は鍛金ベースで非常に時間がかかるんですよね。でも、こういう世界は次から次へと飽きさせないように作品を出さなければやっていけない。そのスピード感にはついていけなかったし、いろんなミラクルは起これどお金には全くならなかった。よくてお礼の菓子箱くらいでした(苦笑)」。

アートで食べるのは大変だと痛感し、アルバイト生活にも限界を感じた石川さんは、東京の鉄工所に就職した。テレビや映画などの金属製舞台セットや装置を製作する鉄工所で、材料の切断、溶接、仕上げなどを一貫して行う職場だった。「作品づくりと似たプロセスを踏みながらも、伝統工芸の鍛金とは異なる近代的な金属加工の基礎知識や技術を一通り学ぶことができたのは運が良かったです」。

しかし撮影したら終わりの舞台セット。「いつまでも残るもの

をつくりたい」という思いが強くなり、2003年に退職、帰郷。2004年、屋号を「金属立体造形工房クラフトキャリア」と名付け独立した。実家の庭に建てた作業小屋でのスタートだった。

アート畑からインテリアの世界へ

当初は「アート作品をつくろう」と思っていたが、知人からの依頼で「金属製インテリア」という需要があることを知った。高橋先生の紹介で、建築家の江角俊則さん（江角アトリエ）から湯の川温泉「湯宿・草菴」に設置する鉄製シャンデリアの依頼が舞い込んだ。中空構造の作品をつくってきたこともあり、配線もイメージできたので躊躇することなく引き受け、それがのちに石川さんの代表作となった。

江角さんのつながりで北欧研修へ行き、金属に対する考え方や価値観が変化した。「北欧の歴史的建造物の素材や気候との関連性に興味があって。当時日本では素材として金属本来の色には意識が薄いというか、神社仏閣でも錆びるとすぐにステンレスを選びがちだったのですが、北欧では時代性を考慮して素材感がマッチするものをチョイスする。街全体の至る所に金属の質感や色味があり、金属素材への愛着を感じました」。しかしその弊害で何でもかんでもハンマーで凸凹にするのがカッコいいと思っていたが、ある方に「叩く意味をちゃんと考えなさいよ」と言われ、金属加工に使う技術も必然性・合理性で選ばないといけないという意識が生まれた。

活動が広がるにつれ作業場が手狭になり、知人の紹介で石見銀山にほど近くの鉄工所の一角を作業場として5年間間借りさせてもらった。建築現場に合わせたオーダーメイド照明などを請け負っていたが、オリジナルの定番商品をつくることも必要だと感じていた。「初めはデザインの突破口が見つからず、

ゼロからの考案で時間がかかりました。最初につくったのは燭台。そこから少しずつ商品を増やし、展示会に参加するようになりました」。中でも「丘のクラフト展」には2017年から毎年出展している。「定期的に参加し、出るからには新作をつくるという、今につながるサイクルができていきました」。

2012年に実家に戻ってからも広い作業場を求め、物件探しを続けていた。次を「生涯最後の引っ越しに」とこれまでのつながりのある米子～出雲エリアに絞って探し、最終的に行き着いたのは出雲市平田町の工場跡。「大きさがちょうどよく、川沿いの景色もよくて『ここだ』と思いました」。妻や近隣の作家仲間に相談し、2020年に購入を決めた。翌年に作業場を移転、2023年には工房2階に展示場として「ガレリア ポルタエリ」を開設した。「広い作業場とできるなら展示場も欲しいと思っていました。ただ商品を売るだけじゃなくて、世界観やコンセプトを伝える場が必要だと感じていたからです。兼ねてからつくりたいと思っていたテーブルや椅子も展示場があることでお客様に座ってみてもらうこともできるし、持っていたデザイナーズチェアも活かせる。理想的な建物でした」。今後は自や他、クラフトやアートを問わず、クリエイターの創作意欲を掻き立てる場所として活用したいと考えている。

金属本来の色や質感を活かすデザイン

クラフトキャリアの顧客は素材感を重視する方が多いという。錆付けや緑青付け、錆を保護する塗料などの研究を重ね最適な技術を確立してきた。「条件が許す限り、できるだけ金属本来の色味を活かしたい思いはありますが、錆びさせる意味はあるか、錆汁が出たり支障をきたす恐れはないのかなど、メンテナンスも踏まえ先回りして提案するようにしています。パッと見はどう見ても錆にしか見えない塗装仕上げもできますし、本当に錆にする意味がある場合は、万難を排して錆させます」。

鍛金や鍛造は時間のかかる技術で、建築現場やオーダーメイドでは活かす機会も少ないが、自社商品には工芸要素も盛り込んでいる。「鉄は硬いものですが、鍛造中は軟らかい瞬間があって、その感触を残したいんです。しなやかな曲線を出すには技術を要しますが、違和感があれば主張が激しくなる。金属は良くも悪くもインパクトが強いので、それを緩和し、空間に馴染ませることに気を遣ってます」。

造形にこだわる石川さんは、普段から紙で模型をつくり、造形の法則を探っている。「紙でできることは板金に置き換えできるので、直接設計に落とし込むことができます。鉄以外の金属素材への置き換えも想定し、本質的な構造を捉えた上で、合理的な形状を探ります。バリエーション展開を考えた時、根幹のコンセプトは理詰めで成立していないと弱いんですよね。どんなものでもシンプルに一つの言葉で表せるものがコンセプトの根幹としては非常に重要で、それをもとにデザインしていくのが大切だと思っています」。

クラフトとアートの狭間で

石川さんは〈作品〉ではなく〈商品〉という言葉を選ぶ。「出発はアートだったので、〈作品〉というと、僕の中では自分本位で内面から出てきたものになる。他者の需要なんかどうでもいい、遠慮のないものというか。一方、〈商品〉は分かりやすい論理や合理性で成り立っていると思っていて、僕は割と理屈を考えるのも好き。作品でも商品でも変わらないこだわりは、安易な模倣はせず造形を理詰めで組み立てるというプロセスから生まれるオリジナリティです。効率は悪いけど」。

最後に今後の展望を聞いてみた。「作品と言えるような鉄製のテーブルと椅子をつくり、バリエーションを増やしていきたい。それと、展示場ができてから、自分に嘘をつくのは駄目なんじゃないか、正直に曝け出した方がいいんじゃないかと思えるようになりました。今までは〈アート〉と〈クラフト〉を分けて考えていたんですけど、それも出し方次第かな、と」。

岩佐昌昭

Masaaki Iwasa

陶 芸

at西郷町

いわさ・まさあき／1979年愛媛県八幡浜市生まれ。2004年備前陶芸センターを修了し、備前・信楽の窯元で修業。2011年に出雲市へ移住、2013年独立して徳雲寺の隣りに工房を構える。2018年「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」に参加。現代茶陶展TOKI織部大賞、田部美術館大賞「茶の湯の造形展」準大賞などを受賞。陶磁器に漆を施す陶胎漆器に銀箔を使用した作品をはじめ、高い技術に裏打ちされた枠にとらわれない独創的な作品を追求する。

とにかく人と会いたくない
直感を信じて陶芸の道へ

「ずっとぬり絵ばっかりしている子でしたね。ひたすらに色鉛筆で色を塗っていました」。愛媛県八幡浜市で育った岩佐さん。母の勧めで野球を始め、高校まで野球部だった一方、中学校からは洋服づくりにハマり、既製服をばらしては型を取り、新しい生地で服をつくったり、自己流で通学バッグをつくっていた。「母親が小さい頃ずっと服をつくってくれたり、革製品の加工をしていたので、その影響があったのかもしれません」。

高校卒業後は、東京のホテルの専門学校に2年間行き、ホテルでアルバイトをしていたが、向いていないことに気づいた。寮生活で知り合った、服飾系専門学校の友達と仲良くなり、学校に潜入して受けた服飾の授業からアパレルに興味を持ち始めた。そこから有名アパレルブランドの接客・販売の仕事に就いたが、もともと接客が苦手ということと厳しい営業ノルマに苦しみストレスが溜まり、とにかく何かをつくることを仕事にしたいと思うようになった。「まずは、あらゆる日本の手仕事が載っている本を読みました。興味のあった刀鍛冶について調べると、外部の人間がゼロから始めるのは難しく、現実的ではないとわかりました。研師(とぎし)なら辛うじて食べていけるかもと思いましたが、やっぱり刀鍛冶になりたくて。山奥でひっそりと刀を打ち続ける人生に憧れていて、とにかく人に会いたくなかった」。

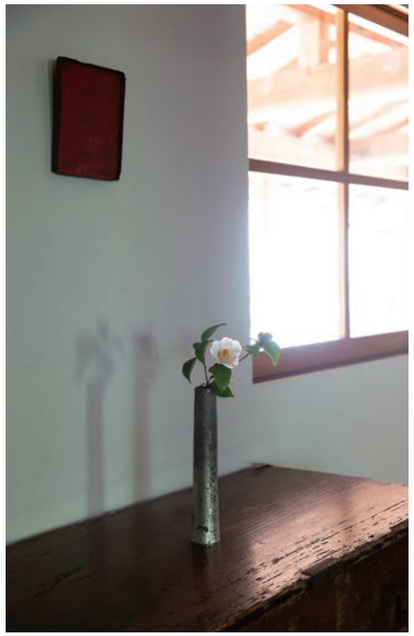
長期休暇に刀剣を見に岡山県備前長船町へ旅行し、立ち寄ったギャラリーで中村六郎氏による備前焼の徳利に感銘を受け、陶芸への興味が高まった。「まだ22、3歳と若かったので、そこで焼物じゃないとなってもまだ大丈夫かなと。備前で陶芸を体験して、本当に好きか、仕事としてやっていけるのか感覚的に考えたくて、東京に戻ってから陶芸教室に通い出しました」。アパレルで働きながら、陶芸教室に1年通い、本格的に陶芸を志すために備前陶芸センターに行くことを決め、アパレルを退職した。

岡山県備前市の備前陶芸センターでは、土を練るところから成形、窯焼きまでの基礎を1年間学んだ。卒業後、山麓窯に職人(社員)として入社。「作家に弟子入りも良いと思ったけど、お金がないし、職人になり轆轤(ろくろ)を引きまくってスキルを上げる道を選びました。職人は2、3人だったので、入社初期からつくらせてもらえたのは良かったです。自分の名前は出ないですが自由につくらせてもらい、山麓窯の商品として並びました」。

入社から3年経過した頃、地元愛媛での独立を考えた。しかし、資金が必要でまだ早いと思い、釉薬(ゆうやく)の勉強ができ、備前焼とは考え方も全く異なる信楽焼を学ぼうと、陶芸家の小川顕三氏に弟子入りした。「最初は断られたんですけど、最終的には筆で書いた手紙作戦。作戦は功を奏し、一度作品を持ってくるように言われて持参すると『これぐらいできるなら』と受け入れてもらいました」。そうして、滋賀県甲賀市信楽町に移り住んだ。

信楽では釉薬ひとつとっても、つくり方が全く異なる。山麓窯では花入がメインだったが、弟子として「小川顕三の器」を作陶するのも新鮮だった。しかし、自分の作品をつくりたい衝動もあり、3年目くらいから仕事後に自主制作を始めた。仕事中は食器ばかりなので、花器をつくることが多かったという。アルバイトもしながら資金を貯め、信楽にきて4年を経て、師匠の元を離れた。

岩佐さんが出雲に移住するきっかけは、出雲市口宇賀町の陶芸家・安食ひろ氏だった。備前時代、お茶の稽古中に安食さんの茶碗が目にとまった。ちょうど近くで個展を開いていた安食さんとすぐに出会うことができ、それから窯焚きの手伝いに出雲に行くようになった。その頃安食さんは、同級生で徳雲寺



の前住職の吾郷元浩さんが亡くなり、お寺の跡継ぎを探すという使命感にかられ、住職の娘を紹介するので出雲に来ないかと、岩佐さんを誘っていた。後に結婚することになるるりさんだった。「お寺のこともわからないし、絶対嫌だと断っていたら、信楽にいる時にひろさん夫婦が妻と妻の母を連れ、仕事場に突然来られて(笑)。そこで初めて妻と会ったんです。それから妻と手紙のやり取りをするようになりました。独立しようという時に、お寺の隣りの空き地に工房を建てることができると言われ、まんまと(笑)。徳雲寺は臨済宗で禅宗なので、禅と焼物がリンクして良くなるイメージもありました」。結婚を機に、2011年に出雲市へ移住した。

お寺を継ぐに当たり得度(とくど)を受け、岐阜県の瑞龍寺(ずいりょうじ)で約1年半修行をした。「過酷でしたよ。二度と嫌。でも、焼物を強制的にやらない期間というのは、終わってみれば新鮮でした」。無事寺修行を終え、2013年に陶芸家として念願の独立を果たした。

自分の作風を求めて行き着いた「陶胎(とうたい)漆器」

縁もゆかりもない出雲の地、独立当初はとにかく地道にやるしかなく、展示会でも何でもチャンスがあれば、場所を選ばずどこでも出していた。その頃は、師である小川さんの優しい作風を真似ていたが、全然ピンとこず悩んでいたという。「同じようなことをやっても、人の反応もあまり良くなく、ずっともやもやしていました。急に自由にやっていいと言われると逆に難しいというか。作家のあたる壁のひとつだと思いますけどね。自分の作品をお金にする、そこが一番大変でしたね」。

信楽での修業時代、小川さんの顧客で蒔絵師の方との世間話から漆に興味を持ち、蒔絵師の教室に拭き漆や金継ぎの技法を習いに通っていたことがあった。そこから漆を使った作品をつくっていたが、「脱・顕三」をすべく改めて陶器に漆を施すという陶胎漆器に取り組んだ。銀箔を用い独自の銀彩表現を生み出すと、周囲の反応が変わってきた。「銀箔は、もしかしたら無意識でお寺の影響があるのかもしれない。仏像や仏具には、金箔や銀箔に漆を使うものが多く、何百年の経年変化がすごくカッコよくて、そういうものに影響されたのかなぁ。なんともいえないですけど」。

岩佐さんの作品は薄さも特徴的。繊細な薄さと銀彩の表現が噛み合い、静寂な雰囲気を醸し出す。「もともと手癖のところもあり、ぼてっとした感じを求められる備前焼では薄すぎるって先輩に怒られていたんですけどね」。

流れが変わってきた

評判が上がり陶房への来客が増えたことで、作品をきちんと見てもらえる空間をつくろうと、2018年には陶房内にギャラリーを開設。「仕事場が半分になるから大丈夫かなとは思ったんですけど、結果的に良かったですよ。ギャラリーをつくってから、運気が上がったような気がします」。

作風を変えてから、コンペにも出品するように。「僕なんかの立場では、賞を取ってアピールするしかなかったので、とにかく公募展に出して、何か陶歴に書けるものを、という思いでずっと出していましたね」。2018年に「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」に参加し知名度を上げ、2022年には第39回田部美術館大賞「茶の湯の造形展」《銀彩花入》準大賞、第14回「現代茶陶展」《銀彩花入》にてTOKI織部大賞(花入での大賞受賞は史上初)とこれまでの創作が大きな評価につながった。

花器をつくるのが一番好きだという岩佐さん。「その根本は備前だと思いますが。田舎の良いところは、どこにでも花や野草があるところですよね」。

禅と焼物が一つになるのが理想

花器の他に器はもちろんオブジェも制作している。「自分がカッコいいというものをつくっているという点では、どれも変わらない。骨董が好きなので、何百年も存在しているかのようなものを目指したいです。銀箔をただ貼るだけじゃなく部分的に飛ばしたりと、新しい要素もプラスできたらと」。

銀箔の他に、青銅釉、辰砂(しんしゃ)など、金属鉱物を好んで表現に取り入れている。「特に緑青(ろくしょう)が好きなので、出土された青銅器や、青銅のトタンが錆びて緑青が出ているのを見ると萌えますね。見方によっては少し汚い感じになる錆、作品としては、品格と緊張感があるものにしたいとは思っています。緊張感は、単純に好みなんですが。普段使いのものより、置いてあるだけで非日常感の出るようなものの方が好きなので。品格と緊張感、この2つは結構ずっと意識しているのかもしれないです」。

最後に、今後つくりたい作品を聞いてみた。「もうちょっと作品にフォーカスしたものづくりをしたいですね。なかなか売りづらいものほど面白いので。自我が出るのか、逆に自我がなくなるのか、その辺は今後どうなるか分からないですけど。禅的な感覚でいうと、自我はない方がいいんですけどね。自我がなくなった時に、本当の作品ができると一番いいんですけど。最終的に、死ぬまでには禅と焼物が自分の中で一つになることが理想ですけどね。それは何十年後になると思いますし、ならないかもしれないけど。せっかく坊さんをやっているので」。

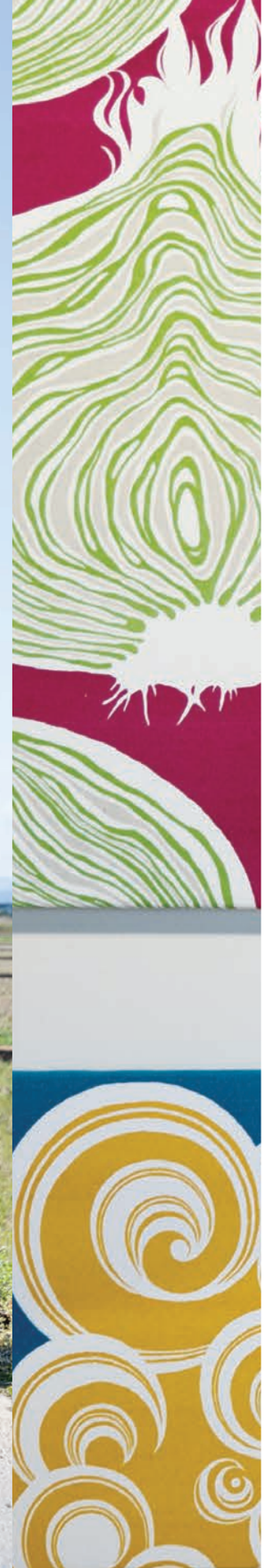
田部井眞子

Makiko Tabei

デザイン・テキスタイル

ミツトリヒトギ
at多久谷町

たべい・まきこ／1981年、東京都生まれ。武蔵野美術大学工芸デザイン学科テキスタイル専攻を首席で卒業後、シルクスクリーンの作家活動を行う。2004年に中学・高校の同級生でアートディレクターの柳本真穂とデザインユニット「ミツトリヒトギ」を結成（2007年解散、2010年単独で復活、2015年に2人での活動を再開）。2011年に松江市へ移住し、翌年出雲市多久谷町の古民家を生活と制作の拠点とする。「育ちゆくもの」をテーマに、生き物や自然物などをモチーフとして、いきものの生命力が感じられるテキスタイルのパターンをデザインする。



“いきもののちから”そのまま布に
小さい頃から好きなものが全部つながる

「絵ばっかり描いていました。植物や動物など。逆に人とかは描かなかったですね」。植物に囲まれた家庭で育った田部井さん。絵を描いていた祖父の部屋に入り浸っては、絵を習ったりと、絵を描くことは身近だった。小学校まではお絵描き教室に通っていたが、その後は漫画やアニメにハマり、その模写を延々描いていた。「アニメ雑誌も買うようになり、学校でもヲタク仲間が集ってわいわいやっていましたね」。

中学3年の時に母から「大学どうするの？あんたは美術しかなくない？」と言われた。呪いのような言葉だと思ったが、妙に納得し美大進学を決め、中学から美大受験の予備校に通い出した。専攻科目を「デザイン」に絞り、手を使って何かしたいと立体系のコースを受験、武蔵野美術大学工芸デザイン学科に合格した。

入学後は工芸の基本的な素材や技法を体験する中で、一番合うと感じたテキスタイルを専攻を選んだ。「母は服を縫ってくれたり裁縫や編み物を教えてくれたり、家ではいつも布が広がっていたんです。母の影響だなってって気づきましたね。母は母でテキスタイルデザイナーになりたかった夢があったみたいで、すべてが繋がりました」。テキスタイルの授業ではろうけつ染や絞り染、織などを学んだ。そして絵がそのまま布に転写されるシルクスクリーンにハマっていく。「エッジはパリッと、線がはっきり出るところがたまらなく、卒業制作もシルクスクリーンで長さ6mの布を5パターン制作して優秀賞を受賞しました。今の大きな布作品のルーツのようなもので、一生の中でも印象に残る作品です」。

大学卒業後は会社で働くイメージが全くつかず、美術予備校の講師と浅草の暖簾屋でバイトの掛け持ちをしていたが、暖簾屋は数ヶ月で辞め、それと前後して、2004年9月に「ミツトリヒトギ」の活動を開始した。

ミツトリヒトギはデザインユニット。アートディレクターであり相棒の柳本真穂さんの存在は外せない。「柳本は中高の同級生。私がつくるものをすごいといつも褒めてくれて、就職活動の頃に自分たちの未来を考えるにあたり、どちらからともなく、『何か一緒にやろう！』という話になりました。はじめの頃は、ミツトリヒトギの作品を展示していろんな人に見てもらったり、自分たちで染めた手ぬぐいを販売したり。そのうち知り合い（主に柳本の会社の方たち）から『手ぬぐいを作ってよ！』という依頼をもらえるようになっていきました」。ユニット名の由来は、20歳の頃にグループ展に出品した「菌が生えた林檎のオブジェ」。学名のようなものをつけようと口からすっと出たのがミツトリヒトギだった。「それを柳本がふと思い出して、寄生して蜜をとり、本体と一緒に育つ生き物だから、自分たちの作品を受け取った方にいい意味で寄生し、一緒に育っていくといいなという願いを込めユニット名にしました」。

名前は決まったが、最初の頃は手探りで、クライアントの言われるままのデザインを摺ったり堅めのデザインをしていた。でもそのうち「こういうことじゃないね」と徐々に今の方向に。「大学時代のデザインのリメイク版の《鯉》は一番の古株です」。個展やグ

ループ展を年に1、2回開き作品を広めた。「展示で手拭いなどを販売し、その売上を元に次の作品をつくる、みたいな感じでした」。さらに展示をキッカケに吉祥寺の和雑貨屋に取り扱いが決まるなど、定期的に卸すルートが徐々にでき始めた。

ミツトリヒトギは2回くらい解散している。「忙しくなってくると、うまく噛み合わず『もうやってらんない』みたいな別れ話がちょいちょい出てくる。だいたい私からで、柳本は『その方が納得するなら』と言ってくれるが、しばらくすると私から『やっぱり一緒にやろう』と泣きつくっていう。私1人だと急に変な方向にいってしまったりもするから、柳本の存在はすごく貴重で。今はもう本当に別れるなんて考えられないですね」。

見渡す限りテーマだらけの島根の生活

2011年、東日本大震災をきっかけに島根県へ。移住当初は松江市にある義実家に同居していたが、工房を持ちたいと割と早い時点から古民家を探していた。義実家から30分圏内に絞って探し、最終的に辿り着いたのが、出雲市多久谷町の古民家だった。決め手は広さと状態で工房兼住宅にできた。「私の母は在宅で仕事をしつつ、私が帰ると『おかえり』って言ってくれたのがありがたくて。だから家に住みつつ家の中に仕事場を持ちたいというのはずっとありました。庭とかをぐるぐると見て回って、絶対ここってピンときて、決めました」。

多久谷に移り住んでからは公民館でワークショップを開催したり、イベント出展したりと活動を広げていった。その頃出会った作家さんの影響で自宅に店を開くことを決意。「テナントを借りて内装工事をして、ウン百万の世界と思っていたのが、彼女は古民家に住みつつ、DIYで改装し、軽やかにお店を開いていたのが衝撃すぎて、私もやる！みたいな」。移り住んで翌年の2013年4月にショップをオープンした。

多久谷の生活でテーマや作風にも変化があった。「見渡す限りモチーフだらけ。ダイレクトに目に飛び込んでくる。筍なんかは東京では水煮ばかりで、皮のままの姿を見たことなかった。あと空が広く見えたり雲の変化だけでも本当に多彩。いろんな感動がモチーフになって、より気持ちが入るようになりました」。手拭い中心に作品を展開していたが、もっと大きいものをつくりたいという気持ちになり、「自分だけでは手拭いが限界だけど、人に染めてもらえばいい！」と、染工場を探して思い切って外注した。1本でも結構費用がかかるが、5本一気につくりお金が底をつく。「やばい！でもきっと売れるさって思ってたら、全然売れなくて（苦笑）。自宅ショップでも、『デザインは素敵だけど、布は別に…』と売れなかったです。」そこで柳本さんに泣きつき、渋谷で展示会を開くことでたくさんの方にミツトリヒトギを知ってもらい、徐々に興味を持ってもらえるようになった。

その前後から、「松江水燈路（すいとうろ）」（2014〜）に手拭いでつくった行燈を出展していた。松江観光協会の担当者にも大きな布のことを話したら、翌年にはその布を使った大きな行燈が採用され会場を賑わせた。さらに2018年にはイベントロゴとオリジナルテキスタイルを制作し、メディアに取り上げられるなど、島根でも認知度がじわじわ上がっていった。

ショップに訪れる人も増えてきていたが、立地上わざわざ足を運ぶという方が多く、せっかくならゆっくりしてもらいたいと2021年5月、ショップ内にカフェをスタートした。「接客して初めて伝わる作品も割と多いから、お客様と繋がる時間が増えるよ」という柳本さんの勧めもあった。当時コロナ禍だったが、今まで届かなかった層の人にも波及し、店の集客は増えた。「カフェができたから来たという方も多く、開いてよかったです」。

鉛筆を尖らせ、気持ちを宿す

ミツトリヒトギの作品は柳本さんとテーマ決め、モチーフを選ぶことから始まる。デザインは伸張や増殖のイメージを意識している。「《薬味》は伸びる方向に揃えるとか、《輪切り》は横に増殖するとか、動きは止めないようにしています。《トマト》は白や赤しかない部分が多くなってしまい、布としてはすごく使いづらくなった。そういう反省も活かしています（苦笑）」。

ノートにラフを描き全体像を掴み、壁に貼った原寸大の画用紙に描いていく。「私は絶対鉛筆で描かないと気持ちが入っていかない。鉛筆はカッターでギンギンに尖らせ、腕を大きく動かしながら形を捉えて描きます」。近づいては描き、離れて全体を見てを繰り返す。そうしてできたリピート図案を繋げてみる。「切ったり繋げたり、ズレを確認してまた描いて、というのを何回もやります。この何やってんの感というか変態的行為が好きなんです」。

原寸で描き上げた後は画用紙を正面から撮影し、iPadに取り込んでペンシルで細部を詰める。工場にはデータで送るため、最後にデジタル作業が必要となる。「全てをデジタルで」とも思うが、どのデザインも必ず鉛筆から始めるのがこだわりだ。「鉛筆を尖らせる時が、書道でいう墨を磨る精神統一の時間。いざ鉛筆を走らせる時には細かいことを考えず集中して入っていけます。鉛筆を立てたり寝かしたりして、線の強弱を付けていきます」。

テキスタイルでは色数を制限されることが多い。「私の中では3色が割とやりやすく、その中で3色より色数が多いように工夫できるのも、私のぞくぞくポイント。制約の中でできることを最大限に、しかも制限にも気づかれないように工夫したいっていう、意地みたいなものがあるんです」。配色を決め、工場に色チップを送ると、小さな生地を指定色と近い色で染めた見本が送られてくる。それを見て仕上がりを想像しながら、色の最終決定をし、染めてもらって完成する。

増殖していくヒトギのデザイン

デザインやテキスタイルの内側にあるストーリーを伝えていきたいという田部井さん。最近では企業やお店のパッケージやロゴなども手がけている。「今までは割と独りよがりな作品が多かったんですけど、最近は見る人にどう感じてもらえるかを意識するようになってきたんです。デザインが持つ力って結構あると思っていて、自分のデザインによってそのものの価値が上がるような手助けができたらなっていうのは、ずっとあります。そこに込められたメッセージが伝わるようなデザインができたらいいなと思っています」。

最後に今後の野望を聞いてみた。「もっと広めていきたいです。ヒトギのデザインも、やっぱりこの場所も。島根県内にヒトギのデザインをばらまきたいです。わりと徐々に夢は叶いつつあるんですけど、もっとジャックしていきたいです」。

安食 潤

Jun Ajiki

陶 芸

at口宇賀町

あじき・じゅん／1982年、出雲市口宇賀町生まれ。2001年岡山県吉備高原学園高等学校陶芸コースを卒業し、島根デザイン専門学校を経て、志野に魅せられ岐阜県の熊谷陶料に入社。2004年からは父・安食ひろのもとで作陶の修業を開始。2006年に田部美術館「茶の湯造形展」で入選、以後も多数入選し、2014年には奨励賞を受賞する。2022年に岡山県高梁市成羽美術館で「安食潤展　PINK革命　WAKUWAKU」が開催される。近年は淡いピンク色の釉薬と柔らかなフォルムが調和した作品 桃瓷彩器を発表、「PINK革命」で陶芸界に新風を吹かせる。

陶芸家の父のもと
探究心の赴くままに自由に育った

「もともと焼物をやっている家だったので、自由に育たせていただきました。ちょっと怒りっぽい子でしたけど(笑)」。陶芸家の父・安食ひろさんのもと育った安食さんは、幼い頃から粘土を触り、自由にものづくりをしていた。「小さい頃につくったオブジェを褒められた覚えがありますね」。

小学生の時、将来の夢がテーマの作文で「陶芸をやる」と書き、漠然と陶芸家への道に進むと思っていた。中学校では剣道に打ち込みながら、「高校で何をしようか」と考えていた矢先、岡山県に陶芸コースがある高校の存在を知り、親元を離れて陶芸の道に進むことを決めた。吉備高原学園高等学校。全寮制の学校だった。「そのあたりから本格的に陶芸について意識するようになりましたね」。

高校3年間は普通科目の勉強もしながら、粘土や轆轤(ろくろ)、焼成(しょうせい)などの基礎を学んだ。「そんなに多くはなかったですが、備前焼の窯元に実習で行くこともありました」。備前焼の焼き締め実習時に〈釉薬(ゆうやく)の面白さのようなもの〉に気づき、それから雑誌で見かけた志野焼に興味が湧き出した。釉薬を施さずに高温で焼き締めた器は、窯の中で松の木の灰が降り掛かり、高温の中で自然釉へと変化する。それに対し、釉薬は水で溶いたものを器にかけ、模様をつくる。「志野は白色と紅色のあったかい感じで、形もどっぷり。昔ながらの焼成の面白さも出ていて魅力的でした。ぽつぽつと開いたちっちゃな穴の中にも緋色の明るみが出ていたり。不思議な焼物で好きですね」。

志野焼に魅せられていった安食さんは高校卒業後、島根デザイン専門学校陶芸コースを経て単身岐阜へ。焼物の粘土や釉薬の原料の世界へ身一つで飛び込んだ。「もう行ってみよう！という思いつきですよね。岐阜県の小さな原料屋『熊谷陶料』に就職しました。実は、はじめ断られたんですけど、父に相談した

ら、『スーツ着て荷物持って何キロか歩いて行けば分かってくれる』と言われて、じゃあそうしよう！と駅から2、3キロ歩いて行ったら、『しょうがないな』と受け入れてもらえました(笑)。そこで原料を学びました」。

昔の人は、山に入り粘土を掘り、それを生成して陶器をつくっていた。「今の人のほとんどは買った粘土で器をつくっているんですよ。僕も粘土は買っていたので、こういうことかと。自分でやることの大事さも学びました」。粘土の他にも、長石や珪石を砕いて釉薬の素をつくり、陶芸家に送り出すまでを担うという貴重な経験をした。さらに、「原料を商品にするには陶器の出来上がりを知らないといけない」と社長自ら、志野、織部、黄瀬戸、瀬戸黒などをつくっていたので、安食さんはそれぞれの焼き方を間近で学べたという。約1年間、熊谷陶料に勤めた後、出雲市に帰郷した。

「それからずっと平田でやってますね。昔だったら弟子入りをして、作陶から、作品の納品から工房の掃除まで何年か修業に出たりするのですが、そこは特にやらずに父の手伝いをしながら焼物をつくっていました」。

好きだった茶碗で評価される

2006年、田部美術館大賞「茶の湯造形展」に志野茶碗で初出品し、入選。「父の転機にもなった歴史の長い公募展で、僕

もなんとか爪痕を残すことができ、その後も出品し続けています」。もともと茶碗が好きだったという安食さんにとって、茶碗は基礎で、一番やりたいもので、究極だった。「抹茶碗は自由だけど決まりもあり表現は無限大。手の中に収まり、表現もしやすいですね」。

初入選の翌年からは塩釉（えんゆう）の施釉技法に取り組み、塩釉茶碗を出品。「父がやっていたのを見ていて。僕も、志野もいいけど家でやるとしたら塩釉なんだろうなと。塩釉は、備前の自然釉と、志野の釉薬の中間みたいな感じがあるんですよね」。窯に生成した器や下地を塗った器をそのまま入れ、一番高温の時に塩を投げ入れると塩に化学反応で雫のようなものができる。釉薬の流れ方や付き方も読めず、失敗することが多いという。「イメージ通りよりも、イメージと違った方が面白かったり。窯の温度や塩の量、タイミング、置く場所でも表情が変わってきますので、ひとつとして同じものがない塩釉ならではの偶然性が魅力的でした」。

2009年、一畑百貨店松江店で初個展を開催。「百貨店での開催は、例えば僕が初代でやると、なかなか厳しかったかなと。焼物は今の時代には厳しく好きな人しか見向きしない世界なので、父の力を借りてではありますけど、ギャラリーも少ない地元でやれたのが良かった。その時の出品は本当に抹茶碗だけだったのですが、父の知り合いにも助けていただいたり、たくさん手にしていただき、今では考えられないほど皆さんに喜んでいただけたのが、すごくうれしかったですね。これで食べていけるかもしれないという手応えもあり、初めて自立できたような感覚がありました」。

2013年、「現代茶陶展」で塩釉茶碗《巌々》が入選し、日本橋三越本店で個展を開催した。一般来場が地元とは桁違いの東京での展示では、様々な客層に合わせるため、茶碗以外のものもつくりだしたという。「お茶道具をつくっていると、水指はないの？花入は？となる訳で、徐々に考え方が変わってきました。抹茶碗だけで、『抹茶碗のスペシャリスト』としてやってはいきたいけれど、なかなか現実的には厳しいので」。

ただ一口に茶碗といっても安食さんの茶碗は幾何学的な婆沙羅（ばさら）茶碗や、硝子切子を陶器で表現した切子茶碗など、表現の幅が広い。そのアイディアのモチーフも様々。「例えば、ごつごつした造形は、武骨な岩肌だったり遠くの山並みだったり。切子は鹿児島の薩摩切子を見に行って特徴を捉えてつくりました。婆沙羅は父の技法のひとつなんですが、父の時代は渋い茶碗がとにかく多く、派手な焼物はあんまりなかった。時代に歌舞くとか、反発的な意味合いの婆沙羅は、表現方法というより「どうだ！」と見せたいという精神的なところが始まり。それを最近は受け継いでやっていますね」。

陶芸家であり父の安食ひろさんとは、2015年から新宿の「柿傳ギャラリー」で、二人展を隔年開催している。二人の関係性は、いわゆる窯元の創業者と二代目、とは違うようだ。「うちは作家同士ですので、同じ職業を継いでる先輩と後輩みたいな感じ。教えてもらったりもあるし、とにかく大きな存在ですよね。僕のつくるものほとんどが父の影響を受けています」。同じ婆沙羅や塩釉でもひろさんとは作風が全く異なる。「二人の展示なので、初代・二代目と思われて比べられてもいいし、別々の窯と思われてもいいし、そこは自由ですね」。

「PINK革命」を発表

2018年頃からオリジナルの桃瓷彩器（とうじさいき）を発表。暗くなっている世の中に鬱蒼しているような息苦しさを感じ、ピンクがあることによって、少しずつ和らいでほしいという想いから制作。「ピンク色は人の心をあったかくし、内臓の色というか人間の内面的な内側の色なので、それで表現したいと始めました。偶然性というよりかは、なるべく計算してきれいにつくりますが、それでもちょっと釉薬が垂れたりするといろんな表情が出てきて、面白いですね」。ピンク色の作品によって、作品と表現の幅が広がった。それまでの武骨な造形とは違い、フォルムが優しい素直な形をつくっていこうと意識に変わったという。

作品群は「PINK革命」と名付けた。「自分の中を革命するというか、自分に革命を起こすというか。インパクトを残そうと思ってやりましたね」。安食さんの中で塩釉にとどまっていた表現を打ち壊すピンク色という革命と、渋い色しかないと思われがちの焼物や工場で大量生産の商品への一石を投じる使い手に向けた革命。「焼物の色ってどうしても白や黒だったりして、触っても冷たいしちょっと渋いものが多い中で、ピンク色って持つ前にあたたかい感じがする。そこが良いところかなぁと思いますね」。

ずっと変化したい

作風をどんどん変化をさせていく安食さん。最後に今後について聞いてみた。「この職業でやると決めたからには、なんとかしがみついていくっていうのもあるんですけど、本当に皆さんに喜んでいただいたり、使っていただいて満足していただくことが創作意欲の源になり、次への原動力へとつながっていく。作品はやっぱり相手がいての話なので、相手のことを考えながらつくるというのが、一番表現したいところですね。相手の考えと僕の考えとが一致するのが一番とは思っています。一方的な考えでオブジェを出すこともありますけど（笑）。焼物をつくっている中で生き方が作風をつくるというか、自分の生き方が作風になってくるので。そういうのが伝わればいいのかなとは思いますけど」。

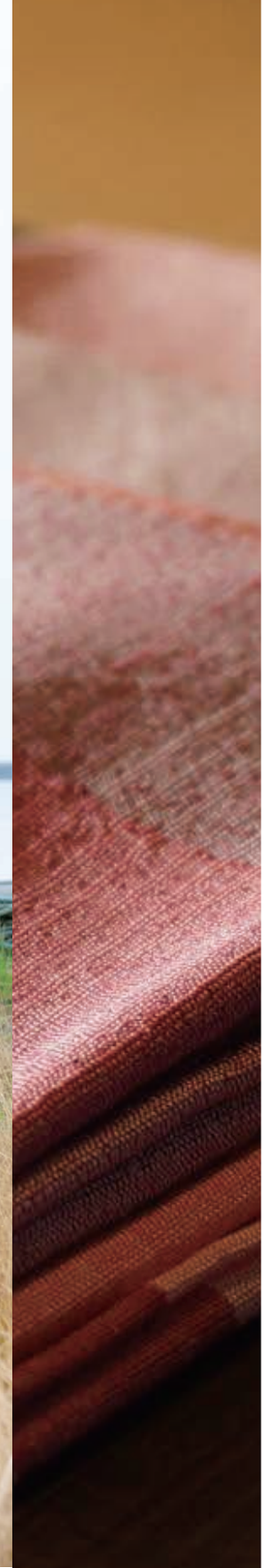
樋野由紀子

Yukiko Hino

染織

at十六島町

ひの・ゆきこ／1976年、出雲市荒茅町生まれ。関西芸術短期大学デザイン美術科卒業後、舞台制作会社勤務などを経て、2001年より倉敷本染手織研究所で染織を学ぶ。2004年出雲市荒茅町に自宅兼工房を構え、2014年に出雲市十六島町に拠点を移す。天然素材で染めた糸を手織りし、暮らしに寄り添い、生活空間を温かく彩る作品を制作する。



目立つのは好きじゃない
一人で籠る作業にドハマりして染織の世界へ

「祖母が着物の端切れをいっぱい持ってて、それを縫い合わせてちっちゃい袋をつくったり。外でおままごとをする時は、料理担当じゃなく、何か草を採ってくるとか、実を採ってくるとか、下準備みたいなことが好きな子でしたね」。子どもの頃から、何かつくったり探したりするのが好きだった樋野さん。目立つのは好きじゃなかったという。小学校の時こそバスケ部に入ったものの万年補欠。「運動部は向いてない」と、中高は美術部に入った。「中学はずっとポスターを描いていて、高校からは絵画と、先生が専門の版画もやりましたね」。

美術系に進みたいと関西芸術短期大学デザイン美術科へ進学。専攻は、当時放送していたテレビ番組「ファッション通信」の影響や、就職も手堅そうという理由で、なんとなくファッションデザインのコースを選んだ。「縫製の授業は楽しくて一番前の席を陣取っていましたが、いわゆる市場調査やブランドマーケティングの授業は一番後ろに(笑)。流行を追いかけたりするのは、自分には向いてないな、と早い段階で気づきました。ちょうどその頃、自分の将来について発表する機会があり、何を思ったか『舞台衣裳がやりたい』と言ったんですよ」。

舞台衣裳の職に就くために大阪よりも東京で活動しようと考え、卒業後は一度地元に戻り資金を貯めて、翌年に上京。上京後もアルバイトの日々だったが、タイミングよく舞台制作会社に採用され、演劇やミュージカルの舞台衣裳の着付を担当することができた。本当は衣裳の製作に行きたかったが、募集はなかった。「でも、まぁいいやと思って。衣裳の着付はやりがいも楽しい部分もあったんですけど、休みがなく、拘束時間も長いので大変でした」。

忙しいながらも仕事は4年続けた。しかし東京で暮らしながらもどうしても人混みが苦手で、一人で籠って何かしたいなと悶々としていたという。そして、ふと「染織を習いたい」と岡山県倉敷市の倉敷本染手織研究所への入学を決意。「舞台で着物に触れる機会が多かったのと、短大時代は布に関わっていたので、自然と染織かなぁと」。当初は1年習ったら東京に戻ろうと考えていたというが「ちょっとドハマリして(笑)」。

ここから染織家の道へと舵をきることになった。倉敷本染手織研究所の同期は20代が5名と、現在も親交のある当時50代の山本ゆりさんの計6名。話すことも染織のことばかりでちょっと「浮世離れしていた」という寄宿生活をしながら、染織を学んでいった。「糸を染めて布をつくっていくっていう作業を、誰とも言葉を交わさないで、すべて一人でできる作業っていうのが、まぁ魅力的でしたね」。

2002年、卒業後は出雲に拠点を移してしばらくは手探り状態だったが、高校・大学の同級生、機織り作家の山﨑加奈さん(蜻蛉屋(とんぼや))からの誘いで2004年に「二人展」を開催したことをきっかけに、活動は少しずつ広がりだし、2010年から境港にある「一月と六月」での「ほんわかあったか展」にpart2から参加しpart6まで続いた。そして、主宰の高橋香苗さん(DOOR book store)の呼びかけで始まった「ひびきあうもの」への参加につながる。「2012年のvol.4から毎年参加していますが、その頃出品していたものと大きく変化はしてないですね(笑)。〈天然素材で〉というのは大切に、倉敷で習っていたことの延長線上にいます。ガラッと変えたりはしないですね」。2015年に大社町の「ANTWORKS GALLERY」で初個展「手織り布展」を開催。その後も個展は隔年ペースで開いている。

身の回りの自然で染める

2014年に縁あって結婚し、もともとは義理の祖母が住んでいた十六島に拠点を移した。結果的にではあるが、十六島の風土も染織に適していた。「風も吹き抜けて日当たりもいいです。柿渋染めは日光がいるので、庭にバーっと干してみたいな」。草木染の染料は、家の庭や実家の裏山に生えている木や畑の草などを自分で採取している。植物は季節ごとに採取し、手に入らないものは染料店で購入している。「例えば矢車(やしゃ)ぶしや栗のイガは冬に茶色くなったものを採取し、玉ねぎの皮などの乾燥保存できるものは、乾かして必要に応じ使っています。草木染だと染液を混ぜることはないですが、何かで染めて乾かし色を付け、その上に違うものをかけて染織するということはあります。あと枇杷(びわ)は枝と葉っぱを一緒に使ったりとか」。

色はタンパク質に反応して付くため、染めの工程は素材によって異なる。絹だとタンパク質から構成される動物性繊維の糸なので色がよく入るが、綿と麻は植物繊維なので人工的にタンパク質を付着させる濃染処理をしてから染めるという〈ひと手間〉が加わる。その後の工程は同じで、「染色→媒染(ばいせん)」という作業を最低2回繰り返す。「もう少し色を付けたい時は3、4回繰り返します。自然のものなので、絶対この色っていうのは決めてないです。例えば同じ重量の栗のイガでも、育った場所や日陰か日向でも色が変わってくる。気分的にもうちょっと濃いほうがと思ったら濃くするし、もうこの辺でと思ったら止めるという感じで。あとはできた色を見て組み合わせて、最終的に作品として形にしていきますね」。

樋野さんの作品は、染料はもちろん、媒染を何でするかも大きな要素を占める。「染料自体はそんなに多くの種類を使っている訳ではありません。だけど媒染でかなり風合いの違う色が楽しめます。例えば、玉ねぎの皮で染めてミョウバンで媒染した時に、今度は鉄で媒染したらどうかなとやってみたり(笑)。次は錫(すず)で、次はチタンで、といろいろ試しています」。天然染料は経年変化が楽しめるが、色飛びや色むらができ、つくり手としては扱いが難しい。「化学染料にすることも悪いとは思っていなくて、良いところもたくさんあるんです。ただ自分の性格上、あまり広げられないので、草木染に絞っています。それに確実性がないところにも面白さを感じます。ムラが出ないように細心の注意を払っているんですが、どうしても出ちゃうことがあるんですよね。でも糸の状態でまばらな色でも、織ったらそれが面白く見えたりして、それはそれでいいかなと」。

織柄についても聞いてみた。「デザイン画を描いたり、何となくこういうのができるんだろうとイメージして始めるのですが、思っていたものと違った時は、その時点で一旦手を止めますね。そしてちょっと離れて時間を置いて、再度見た時に受けた感じが、案外良いかもと思ったらやるし、やっぱりダメだったら解く。経糸(たていと)は機に掛けて張ると変更ができないですが、緯糸(よこいと)は途中でも違う色の糸に替えることができます。だから結構糸を入れては外しを1日繰り返していることもありますね」。最初のイメージも大切にしながら、最終的には自分の感覚を一番重要にしているという。「その時その時、ほとんど感覚でやってますね(笑)」。

裏方思考のものづくり

樋野さんの染織物は、クラフト作家とコラボレーションをした作品もよく目にする。例えば、伊藤大介さん(hibi)は染織生地を巾着に、岡本英利哉さん(Frenzy)は染織生地をワンピースやジャケットに仕立てている。生地だけではない。吾郷直紀さん(吾郷屋)はノートの花布(はなぎれ)に絹糸を取り入れている。「人の手で染めているからこそ、1本の糸でもたまに染め上がりが微妙に違うのが面白い」とその魅力が作家たちの創作意欲を描き立てている。「材料提供をすることしかできないので、それを使ってもらえるのはすごいことです。もしかして、そっちがやりたいのかなと思ったりもします。誰かの作品の土台じゃないけど、材料をつくるのもすごい楽しいなと。結構、裏方思考なんですよね。割とそういうのが好きで。自分はあんまり表に出たくないっていうか」。

自身の作品としては、小座布団を近年初めて製作。「自分の中で流行りがあり、いまは反物がつくりたい気分なんです。そこで反物を織ってから、さて何をしようって。それでパッと『小座布団いいかも』って思い浮かんだんです」。

自分の赴くままに制作を続ける

自身と向き合い、今できる範囲のことを無理をせずやっているという樋野さん。「(前出の) 山本ゆりさんが、80歳まではやるとおっしゃってて。私もそれくらいまでできてたらなとは思っています。若い時みたいに、これしてあれしてっていうのはもうあんまりなく、自分のできることを粛々とやっていく感じですが、長く続けたいなとは思っているんですよね」。

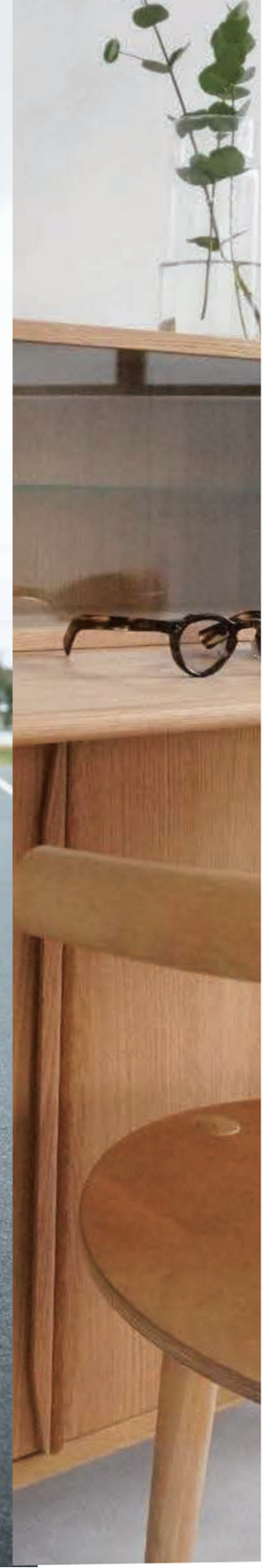
最後に、染織物を手にされる方に伝えたいことを聞いてみた。「使ってみて合わなかったら止めてもいいですし、いいと思ったら使ってもらえたらうれしいです。天然染料は色が褪せていくのも早いけれど、ガンガン使ってもらい、色褪せも含め楽しんで、生活に物が馴染んでってくれたらいいなと思います」。

原 隆介
Ryusuke Hara

家 具

RYUNOSU furniture
at平田町

はら・りゅうすけ／1982年、出雲市湖陵町生まれ。2004年、島根県立東部高等技術校で家具製作を学ぶ。2012年1月「RYUNOSU furniture」を開業して、同年9月にショップを併設、2018年には新館をオープンする。2024年、出雲市平田町にギャラリー「mila gallery」をオープン予定。デンマーク製のヴィンテージ家具をリスペクトし、オーダーメイドの家具を制作する。



家具ひとつで部屋の雰囲気が ガラッと変わった

「絵も下手だし、技術の才能もない。どちらかというと身体を動かしていることが多かったですね」。当時のJリーグ人気で小学校からサッカーをしていたが、中学の時、4つ上の兄の影響でスケボーにハマったという原さん。「高校からは、地元湖陵の友達やスケボーを通じて知り合った他校の友達とスポットを探しては至るところで遊んでいました。他は全然ですけど、スケボーだけは本気でした」。兄の影響はスケボーだけではない。「服や靴、音楽とかをちょっとかじっていて。スケボーからアメリカ文化にいき、スケーターのファッションやヒップホップ、好きなスケーターが出てるビデオで流れてる音楽を調べてたりしていました」。

高校卒業後は、危険物取扱者の資格を取得し、ガソリンスタンドに就職。就職後もスケボーを続けていたが、だんだんと仲間が減り、途中で辞めた。その頃から付き合っていて、後に結婚する裕子さんの一言が家具の世界へと入るきっかけとなる。「スケボーばかりしていたんですが、洋服や靴が大好きで、たくさん買ってたんです。だけど、ある日、妻が僕の部屋に来た時、「めっちゃ清潔できれいなんだけど、マジでダサイ」って言われて。親友にも洋服とか好きなのになんで部屋にこだわらないんだってよく言われてました。家や部屋は帰って寝るだけのイメージだったけど、それは駄目なんだなって思いました」。その後、裕子さんからブランケットや照明をプレゼントされた。「照明を吊るしたら、部屋がすごい変わって！ベッドにブランケットをかけただけでも全然違う。それに感化され、ホームセンターで材料を買いDIYで家具をつくってみたら、家具つくるの面白い！ってなり、そういう仕事ないかなと思ったんです。まずは学校に行こうと思って、ガソリンスタンドを退職し、出雲の東部技術校に入学しました」。

島根県立東部高等技術校に入る頃には家具にどっぷりハマっていた。アメリカ文化が好きで、アメリカで流行の家具を調べていたところ、イームズ（ミッドセンチュリーインテリアの代表格）に出会った。「イームズからですね、僕が家具が好きになったのは。ファイバーグラスを使った椅子や成形合板の椅子が多く、そこまで木工っていうのはなかったんですけど。木工に興味を持つきっかけは、ジョージ・ネルソンのネルソンベンチ。シンプルな形だけど、めちゃめちゃ存在感ある。木でこんなにカッコよくなるのかって。こういうのがデザインなんだろうなと。在学中には完コピして、リプロダクトをつくりました（笑）」。

技術校では、しっかりとした機械で実習でき、講師にも恵まれた。「あれこれ駄目と制約するのではなく、やってみろという感じで教えてくださった。拘束されてたら僕はつまんないってなっていたかもしれない。今でもその講師にはお世話になっています」。

卒業後は出雲の木工所に就職。機械で家具をつくったり、店舗での接客や営業にも携わったが1年で辞め、その後は接客業を転々とした。その頃には家具は趣味になっており、結婚もしたので、家の中をかっこよくしたいと夫婦で部屋のコーディネートを楽しんでいた。DIYの腕も確実に上がっていた。

ある時、働いていたお店の什器の造作を頼まれた。大きいものとなると場所も機材もなかったので、技術校時代の講師にお願いして作業場や機械を借り、本格的な造作をした。作業中に「やっぱ家具がやりたい」と呟いたのを聞いていた講師から機械の入札情報を教えてもらい、運良く木工機械を入手。平田出身の裕子さんのツテで見つけた現在の工房に機械を設置したが、稼働するには200ボルトの電気が必要だった。「趣味で家具をつくろうと思っていたけれど、よく考えたら独立した方がいいのではと思い、妻に相談したら、『私もそのつもりだ』って言ってくれたんです」。2012年1月15日に「RYUNOSU furniture」開業。独立を見越してデザインの

学校に通っていたという裕子さんが、屋号の命名とロゴデザインをした。

自分のスタイルを見つけた出会い

開業後は起業仲間から美容院のドレッサーとカウンターを、地元の先輩からはベッドを依頼されたりと人に恵まれた。順調なスタートだったが、1㎜や0.5㎜の厚みの違いに神経を使ったり、多額のお金を頂くプレッシャーもあった。「家具つくってたら幸せっていうわけでもなくて、どちらかといえばほぼほぼ辛い。やっぱり大変なんですよ。でもたまに一瞬だけあるんですよね。訓練校に通ってた頃のように、明日が楽しみで、早く削りたいとか、こうしたいみたいな瞬間が。9割辛いんですけど、1割だけ楽しい時があるから続けられるんです」。

開業して2、3年くらいは現在のようなデザインスタイルが定まっていなかった。転機は出雲の「irori hair」の改装に携わった時のこと。オーナーの藤原理央さんからオーダーされたイギリスのロココ調デザインは、当時の原さんには馴染みがなかった。「いざつくってみたら、すっごいハマって(笑)。自分の感覚って当てになんないんだなって思いました。全く興味のなかったものに興味を持った時の反動って、すごい大きいんですよね。そのことがなければ、僕は一生つくってないと思うし。自分の家具の方向性というか道ができたんです」。他にも懇意にしているデンマーク家具コレクターの方に家具の仕入れ先を教えてもらったりと、少しずつヴィンテージのテイストに移行していった。「5、6年前ぐらいから、やっと自分の家具がずっと見ていられるようになったんです。それまでは何年か経つと気恥ずかしくなってしまうこともあったんですけど」。

積み上げた伝統にリスペクトをもってリペアする

2012年9月9日に工房内にショップをオープンし、2018年に新館を併設したRYUNOSU furniture。ヴィンテージ家具も取り扱い、家具のリペア(修繕)の依頼も多い。「手を抜かずにきれいに直して、使う人が最終的に大事にしてくれて喜んでもらえるような家具を目指しリペアしています。やっぱり僕らはヴィンテージ家具に対しての愛情はすごく深いので。うちで家具を買い、家具を大事にすることに気づき、前から使っていた家具が壊れたから直してとか、張り替えてとか言われるとめちゃめちゃうれしい。もう絶対直しましょうってなります」。

ヴィンテージの魅力をもっと知ってほしいと定期的にヴィンテージ家具のフェアをショップで開いている。「ここがヴィンテージ家具で埋まった瞬間、一気にデンマークになり、存在感が半端ない。家具職人や大事に使った人のオーラというか、空間が一気に変わるんです。それをお客さんにも肌で感じてもらいたいです。でもまず自分が見たいっていうのがあるんですよ。この家具職人は0から1をつくり上げた人たちなんです。機械が備わっていない60年前にこんな加工ができるのは、技術がないととてもじゃないとできない。それを僕らは引き継がないといけないし、手間暇かけたデザインを僕らが諦めてやらなかったら、多分後世に引き継がれない。だから家具職人たちは、このデザインをリスペクトしてるんです。オマージュしたものは世の中にたくさんあるし、中には粗悪なものもある。僕がヴィンテージ家具をやってるのは、自分の糧にしたい、見て目を鍛えたいっていう、もうそれだけです」。現在新たにアポイント制のヴィンテージ家具の展示場「mila gallery」を準備中。スワヒリ語で「伝統」を意味する「mila」。アフリカンアートなども好きで、伝統的なものは人の心を動かすであろうという思いを込めて名付けた。

家具づくりではなく、家具が好き

ヴィンテージ家具を仕入れる一方、隅から隅まで写真を撮り、採寸もしてつくり方も同時に研究している。何がカッコいいのか観察しすると、パーツの大きさや部材の付け方など細かな気づきがあり、それが自身の制作に活きている。

「0から1をつくっている人ってほとんどいなくて、それを生み出した人って、本当に一握りの天才しかいないと思う。それこそ相当努力した人か、そういう才能に満ち溢れる人かぐらいですね。自分の色が出せていると思っている人も、どこかで絶対に要素が入っていると思う。自分がいざ死ぬ前に『俺、これもしかしたら生み出したかもしれない』っていうのができたらいいなって思っています。ヴィンテージ家具にインスパイアされながら、良いところは真似をして、影響を受けていきながら、自分の色が少しずつ少しずつ出せるようになればと思います」。

RYUNOSU furnitureでは、家具だけではなく照明も含めた空間づくりを提案している。「照明ってめちゃくちゃ大事。とにかく雰囲気を良くしたければ照明買ってくださいって必ず言うほど(笑)。自分の家具をつくる時もめちゃめちゃ陰影を意識します。いい家具っていうのは必ず陰影がでるんです。朝日で影の色味が変わり、夜は月あかりで柔らかいラインが出る。それが良い家具の特徴なんですよね」。自分が本当に好きなものをつくり、それを置くことで家が完成するというような家具をつくっていきたいという。

自分たちのセンスに合う、本当に好きなものをセレクトしているというショップでは「宮崎椅子製作所」(徳島県)の椅子を取り扱っている。「カイ・クリスチャンセンの名作チェアを復刻している宮崎椅子。開業したら絶対入れるというのは頭の中にあったんです。自分には椅子はまだつくれないと思ってたし、今もまだつくらない。みんな勘違いしているんです。僕は家具が好きなんだぞ(笑)」。

ヴィンテージの中でも特に愛が深い椅子はまだつくっていない。最後に、原さんが椅子をつくるタイミングを聞いてみた。「もうつくると思いますよ。近いと思います。まずは自分のために。自分が座ってみてからのスタートなんで。お客様に売るような椅子は、とてもじゃないけど一発目からできるものじゃないから、何年かかけて、これだったら長く座ってもらえるモノができたら、RYUNOSU furnitureに並べます」。

伊藤大介
Daisuke Ito

革・帆布

hibi
at松江市八雲町（野郷町出身）

いとう・だいすけ／1978年、出雲市野郷町生まれ。20代前半は古着屋などで勤務する。2007年より米子市のミントチュチュレザーで修業し、2011年に独立。2012年「トラディション」を創業し、2013年にブランド「hibi」を発表する。2015年に松江市八雲町に工房兼ショップをオープン。長い年月をともに過ごせるシンプルで時代を選ばない作品を製作する。

どこにも売ってないから
自分のためにつくりたかった

実家が縫製工場で、小さい頃からミシンを触り、高校時代には友人と服づくりをしていたという伊藤さん。ファッションに興味を持ち始め、欲しくても地元に売っていなかったシンプルなスウェットを真似てつくって着たりしていた。「最初は元祖アメカジが好きでしたが、徐々にHOLLYWOOD RANCH MARKETとか、ヨーロッパっぽいテイストのアメカジとか、インポートにハマってました。古着にも興味がいき、出雲や松江、米子の古着屋を巡り際どいデザインの古着を探していました」。高校2年の時に出会った「ネイビーブルー」（松江市）代表の田淵昌彦さんにカリスマ性を感じ「雇ってほしい」と打診したが、採用のタイミングが合わず叶わなかった。

高校卒業後、進学のために島根を離れたが半年で中退し、帰郷。その後はフリーターをしていた。知人から「古着屋を立ち上げるので来ないか」と声がかかり、洋服関係にいきたい思いがずっとあった伊藤さんは、ここで初めて古着屋で働くことになる。「実際に働くと想像と現実が違い、仕入れにしても何にしても人間関係なんだと思い知りました。ノウハウがないとなかなか難しい。仕入れが決まっても向こうからの情報しかなければ、そんなに良いものが集まらないんです。当時の買い付けは箱買いが当たり前。1箱の中に良いものや際どいのはいくつかあれど、あとは全部ノーマル。ノーマルは他店とかぶりやすく売り切るのが大変。仕入れたいものだけを仕入れられていたら、もうちょっとは頑張れたのかなっていうのはあるけど、24歳くらいで何も知らないまま買い付けに行ってましたし、ちょっと難しかったですね」。

その後、しばらく県外へ出て、洋服の世界から離れた。ちょうどその頃、高校の頃に一緒に服づくりをし、将来は洋服屋になりたいと言っていた友人が松江市で「libere」という古着屋を始めた。現在は「BHAVAN」（松江市）店長の田中良平さんだ。「それで内心なんか満足したというか。どこにも売ってないから漠然と自分のお店を持ちたい気持ちはあったけど、良平は同じ時代を歩いてきた友達で、好きなジャンルも同じ。自分が店をやる必要性をそこまで感じなくなりました」。

29歳で帰郷。仕事を決めていなかった伊藤さんに、田中さんは、libereで取り扱う米子市の「ミントチュチュレザー」（代表川口淳平氏）で従業員募集していることを教えた。革製品を中心とした店舗兼工房。販売から職人への方向転換だった。「僕の中ではつくることと売ることは一緒だったんです。服はつくっていたし、革はファッションアイテムとしても好きだった。何よりジーンズのように経年変化を楽しめる素材として、革を形にすることに興味はあったんです」。そうして、ゼロから革の世界に入った。「作家であり代表の川口さんは育てながら、注文を受けながら、つくりながらで、すごい大変だったと思います。僕は純粋に初めてのことで、とにかく必死。つくること、ウェブに商品をあげること、覚えることが多かった。川口さんは基本何でも自分でしたい人だから、影響を受けたどころではなく、すごい勉強になりました」。川口さんの存在はいつしか伊藤さんのものづくりの指針となった。

革への見方にも変化があった。それまでは使い手としてのアイテムの経年変化にしか目がいかなかったが、つくり手となるとメンテナンスや修理で見る機会が増える。「同じものでも使い方や暮らし方によって全然違うのは面白いですね。その人の色にしかならないっていうのはすごい感じました」。工房での生活は充実していて独立志向は強くなかったが、ミントチュチュレザー自体が転換期を迎え、伊藤さんは2011年に退職。必然的に独立をすることになった。

作家性と職人性の狭間で

最初の頃は松江のアパートの一室で川口さんの下請け中心

性は出さなくてもいい、あえて表現的な作品をつくる必要がないと思っていました。でもやり続けてきて、やっと自分っぽいものができてきたかなと感じています」。

2012年に自社ブランドを「hibi」と名付ける。「日々使ってもらう」という意味から、ロゴの砂時計は時間の経過をイメージして、妻・麻依子さんが考えた。

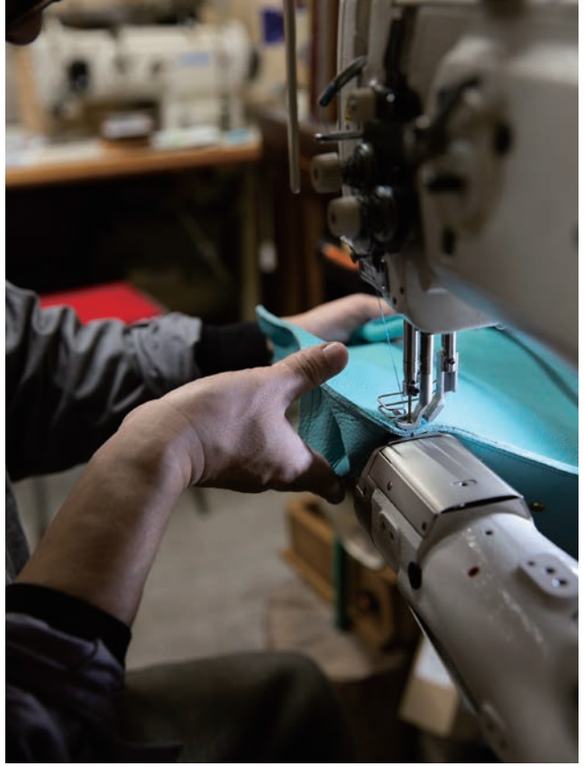
いずれは店舗を持ちたいと、店として分かりやすい場所、かつ、子育てや生活に適した環境を求め、土地や古民家、空き家をずっと探していた。ある日、偶然通りかかった素敵な家が気に入り、数年後に不動産サイトでその家の写真を見つけ、店舗内装などの設計をお願いする予定の寺本和雄さん（寺本建築・都市研究所）と見に行き購入を決めた。寺本さんは高校時代の遊び場だった平田図書館・学習館の設計者でもあった。予算の都合上、塗装、畳の床板外し、クロス貼りなどできることは全部自分たちで行い、2015年、松江市八雲町に店舗兼工房をオープンさせた。

2013年には「出雲かんべの里」（松江市）にて作家有志で開かれた「ステップ展」に参加。翌年から10年以上続く「丘のクラフト展」の前身だった。展示会などに全然出ない伊藤さんを心配した川口さんの勧めで、商品も少ない中、出展する初めての展示会だった。それ以降、松江市内外でポップアップを開いたり、展示イベントを企画をしたりと活動の幅を広げている。

に仕事をしていた。翌年に「トラディション」という会社を設立。「川口さんの思いを広げられたら、という思いもあり、『伝統』の意味を持つ会社名にしました。ただそれだけでは厳しいというか、僕は自分自身に作家性があるとは思っていないし、ミントチュチュレザーでは100%職人性で働いていたところがあり、作家性をどう出していくかで苦労している方だと思います。芸術家タイプで作家性のある人は自分をどう表現するかを作品に乗せると思うんですが、僕はどちらかというと職人的な部分で、お客さんの求めるものを形にできるかを考えている。別に作家

自由に遊べる余白を

hibiの製品はシンプルで時代を選ばない、日々使えるものを目指している。実際にオーダーを受けた時は、試作品をつくり、



実際に使ってもらって調整をして、改めてつくることもあるという。「一概に全部そうではないけど、特に最初の頃は1回使ってもらって、耐久性を確認しつつ、より良くしていく手順を踏んでいました。今は経験則で補えるようになってきたし、自分用につくったサンプルで試しています。でも想像し得ない新作をつくったら実際に使ってもらうことはあります」。

革の魅力の一つは経年変化。「自分でもまだ分かりきれていないのが魅力じゃないですかね。だからお客さんに渡った商品の経年変化は、僕にとっては学びになります。ある程度予想してるけど、予想外なこともある。革の素材としての可能性も引き出したいと思っています」。

hibiでは革と帆布を扱っている。二つの素材の相性はよく、素材としての丈夫さと、バランスの良さがあり、鮮やかな持ち手が特徴の「画材バッグ」などを近年発表した。「持ち手は当初単色でつくっていたけど、次につくるときに変えてみたらそれがよくて、色違いのパターンをつくってみました。革の紐も、最初は鞄を畳めるように付けていたら、いろいろとカスタマイズしてくれるお客さんもいて、いろんな感じで遊んでくれてるのも面白かったです」。

商品の完成がゴールではなく、スタートだという伊藤さん。「僕は美術品をつくっている訳ではない。経年変化を楽しめたり、ファッション的にもアイテムとしてもお客さんが自由に遊べる余白あるのが大事。完成品を売っているという感覚はないというか、使ってもらって完成するというか。その人の暮らしや生活がそこに現れてきて、その人だけのものになるのが魅力だと思っています」。

面白くなってきた

最近は自分の色を自然に商品に表現できるようになってきた。「こういう素材を使ってみたら面白いかなとかとつくってみたら、それが楽しくなってきたり、ちょっと自分の色を入れてみようとか。これまではそう考えられなかったんですけど、自然とできるようになってきました。シンプルな中にあえて色を出すことによって、違和感をつくろうとしていたけど、それがさりげなく出せるようになってきたとは思います。主張し過ぎずに主張ができるようになってきたというか」。

素材の特性を知った時にインスピレーションが湧くのだという。「例えば、革は鉄に触れると酸化して黒くなるんですけど、そのムラを活かしたいと、3年くらいかけて商品化しました。面白い感じになっています」。

最後に今後について聞いてみた。「こういうもので革を染めてみたいとか、革にこだわらずやってみたいこともあるんですけど、職人の延長線上の中で、経験からつくれるものをつくっていくしかないんだろうとは思います。作家にはなれないと思っているというか、そういう才はないから。でもその中であがこうかなとは思っています」。

かわなべかおり

Kaori Kawanabe

ガラス

ガラス工房Izumo
at斐川町出西（平田町出身）

かわなべ・かおり／1977年、出雲市平田町生まれ。1998年、比治山女子短期大学美術科を卒業後、東京ガラス工芸研究所を修了し、エズラグラススタジオ「BLOW硝子塾」に入学する。2001年より福井県の金津創作の森ガラス工房に所属。2010年からは制作拠点を富山県に移す。2016年、出雲市斐川町に「ガラス工房Izumo」を設立。2019年、島根県総合美術展知事賞を受賞。2021年より「山陰ご縁むす美レディース」優勝トロフィーを制作。使い手に寄り添った涼やかで温もりのある作品を制作する。

自分がつくるものが透明だったら
見て楽しむガラスから、つくって楽しむガラスに

「（ガラス瓶は）透明で光を当てるときれいで、家の窓辺にたくさん並べてました」。活発でよく外で遊んでいたというかわなべさん。ガラスが好きで、海でガラスのかけらをずっと拾って集めたりする幼少期だった。当時、母親のなかで流行っていたという紙粘土人形のレリーフを一緒につくっているうちにものづくりにも興味が湧いていった。「お花畑や野菜などを紙粘土でつくっているうちに、どんどんものづくりが好きになっていったような気がします」。小・中・高はずっとバスケ部だったものの、高校時代は美術部と兼部した。「絵は描いていましたが、ものづくりが好きだったので、新聞から何かを作ってみたり、ミシンでバッグをつくってみたりもしました。ものをつくることがすごく楽しかったですね」。

高校卒業後は、広島県の比治山女子短期大学（現・比治山大学短期大学部）美術科の彫塑コースに進学。「彫塑コースでは、粘土から原型をつくり、石膏やセメントを詰めて制作していました。じっくりとやる感じでしたね」。

在学中、広島県の「ガラスの里」（2018年閉館）でパート・ド・ヴェールでつくられたガラス作品に出会い、幼い頃の記憶やこれまでの経験が積み重り、ガラスを見て楽しむことから、ガラスをつくることへと興味が移っていった。パート・ド・ヴェールという技法は、粘土で形をつくったものを石膏で型取りし、粘土を取り出しガラスを詰めて焼く。その過程は彫塑をつくる過程と似ていた。「自分がつくる造形物が透明だったらきれいだなと思い、陶芸科の先生に相談したところ、『ガラスの学校があるからそっちに行ったらいいのでは』と助言をいただきました」。大学卒業後は東京ガラス工芸研究所に行くことを決め、ガラス作家への道を進むことになる。

「研究所では、すごく学ぶことが多かったですね。なかでも、電気窯を使って制作するキルンワークが好きだったので、卒業制作もキルンワークで制作しました。キルンワークはすごく魅力的だったのですが、その一方で、吹きガラスの方にも興味を持ち始めました」。吹きガラスの技術習得には相当な努力が必要で、練習の日々が続いた。学校の先生やスタッフのアシスタントもしながら、経験を積んでいった。この頃には、ガラスで手に職を持ちたいと考えていた。

吹きガラスをもう少し突き詰めて学びたいと思っていたところ、福井県の「金津創作の森ガラス工房」に吹きガラスに限定したスクールが始まるということを教えてもらった。東京ガラス工芸研究所を修了後、エズラグラススタジオ「BLOW硝子塾」の一期生となり、その後エズラグラススタジオのスタッフとして10年間勤務した。

エズラグラススタジオ時代の作品も、今と変わらず器物が多かった。「吹きガラスなので、器の形状が一番つくりやすく、日々生活する器をつくる方が心地よかったりしたので」。福井県で創作しながら、地元での活動も始めた。松江市の「ギャラリーさんれいく」や大田市三瓶町の「ドマカフェ」などで個展開催。この頃から「島根県総合美術展」（工芸部門）に応募し、実用品だけではなく大きい作品も制作していた。「島根県総合美術展」は、用の美というより、造形としての美の追求でした。ガラスらしさを出せるフォルム、やわらかさであったり、光が美しく差し込むように意識しました。しっかりと照明を当て、ガラスの美しさを見てもらいたいと思っていました」。

エズラグラススタジオでは後に夫となる川邉雅規さん（49P）との出会いもあった。その後結婚し、活動を共にすることになる。

雅規さんと「ガラス工房Izumo」を立ち上げる

2010年から富山県富山市に制作の拠点を移した。300年以上の伝統の薬売りに由来した富山ガラス。明治・大正時代にガラスの薬瓶製造が盛んになり、現在は世界有数の「ガラスの街」として知られる。街にはギャラリーもたくさんあり、ガラス作家を育成するための、レンタル工房も充実していた。「街全体としてものづくりに対して理解のあるところで、良い街だったな、とは思いますね。すごい数の作家がいるので、他の方の作品から刺激を受けることも多々ありましたし、発表する場も多いので、『負けないぞ』みたいなところもあって、楽しい部分もありました」。

一方で作家が多い分、競争が激しく、芽を出さないとどんどん埋もれてしまうという苦しみもあったという。かわなべさんは富山でもグループ展参加するなどに精力的に活動していった。

タイミングが重なり、2016年に出雲へ活動拠点を移す。縁あって、自宅の平田町から車で約30分の出雲市斐川町の出西エリアに、雅規さんとともに2016年に「ガラス工房Izumo」を設立、工房兼店舗をオープンした。

出雲での制作活動は一からのスタートだった。当時の出雲では手づくりのガラスは馴染みが薄く、なかなか理解されにくかったという。「最初は値段だったり、作風だったり、色だったり、形だったり、ガラス作品を見たことがない方が多かった。しかし、徐々に理解してくださる方が増えたと思います。やっと皆さんが手づくりの価値に気づいてくださるようになり、ちょっとずつ合点がいってきたのかなとは思います」。

工房では、ガラスの体験メニューもあり人気を博している。「小さい頃にいろいろと経験しておくと、そこからひらめきが湧いてくることもあるので、そうした経験の一部になれたらと思います。ガラス体験ができるところは全国的にも少ないので、積極的に使ってほしいなと思います」。

子どもの体験は将来に残る一つの貴重な経験となり、大人の体験では、深い理解とガラスへの愛着が育まれる。それは単に〈買う〉喜びだけでなく、〈つくる〉楽しみを通して、ものづくりの良さを伝えることにつながっている。

遊び心あるガラス

涼やかで温もりもあり、使い手に寄り添った印象があるかわなべさんの器やグラス。透明なものばかりではなく色とりどりのバリエーションを展開している。「青でもいろんな青があったりします。私が好きな色と夫が好きな色は違うので、工房内でいろんなテイストの商品が並びます。好みの合うもの手に取っていただければうれしいです。ちょっとほっこりするようなものを手掛けたいなということは常に思っています」。

ポップな商品も棚に並ぶ。ガラスに斑点模様をつけて、牛乳を入れると牛の図柄が浮かび上がる「ミルコップ」、雨が多い山陰の特性を逆手にとった外においても安心なガラスのてるてる坊主の「てるこさん」など。これらは友人と話をしていて生まれたもの。自分だけでは出てこないものが出てくるのが面白いと、思いついたアイディアを柔軟に取り入れている。

「皆さんに使ってもらって、吹きガラス作品が日常にある生活を楽しんでもらいたいですね。日々使用して癒しや喜びを感じてもらったり、おもてなしの際や身近に使って楽しい時間を過ごしてもらえたらと思います。『良かったからまた買いにきたよ』と言ってもらえるとすごくうれしいですね」

ガラスらしさの出るデザイン

一方で、公募展出品など、美術作品制作を続けている。「本当はあんまり題名も付けたくないんです。ガラスの模様を見て、それぞれの価値観で感じてもらえたらいいですね。あとパブリックアートも好きなので、いつかつくりたいなという思いはありますけど、大変そう(笑)」。

夫婦ともにガラス作家であるが、作家としてお互い尊重しているという。「多分、他の工房のご夫婦だとお互いに意識することがあるんでしょうけど、うちに関しては本当に全く別。お互いつくったものに関して話し合ったりはしません。お店のことだったり、『ここ倒れやすいよ』と危ないところなど、フォローし合っています」。

最後にかわなべさんにガラスの魅力を聞いてみた。「ガラスの厚みがある部分に光が差した時に、特に魅力を感じます。ただ、器として使用する場合、口が薄いほうが使いやすいので、そのバランスをとりながら〈ガラスらしさ〉を壊さないようにデザインを心がけています。ドロドロのガラスの何もないところから形ができることや、息や手技によってどんどん形を成していく様がすごく好きなんです」。

川邉雅規

Masaki Kawanabe

ガラス

ガラス工房Izumo
at斐川町出西（平田町在住）

かわなべ・まさき／1971年、栃木県佐野市生まれ。1997年、明星大学日本文化学部生活芸術学科を卒業後、福井県の金津創作の森ガラス工房に所属。2007年よりオーストラリアのEdols Elliott工房スタッフとなり、帰国後2010年富山ガラス造形研究所助手、2013年から富山ガラス工房に勤務する。2016年、出雲市斐川町に「ガラス工房Izumo」を設立し、代表をつとめる。同年島根県総合美術展知事賞を受賞。2020年に日本伝統工芸展に入選、2022年には日本工芸会新人賞を受賞する。日本工芸会準会員。オーバーレイの技法を駆使して、多層模様の美しい緊張感を持つガラス作品を制作する。

今でも覚えている衝撃
概念が覆されたガラス作品との出会い

「昆虫や動物などに興味があり、図鑑を見るのが大好きな子どもでした」。テレビや漫画、プラモデルやラジコンにも夢中で、絵を描いたり何かをつくったりするのも得意。外遊びも室内遊びも好きだったという川邉さん。ただ、「将来の夢は?」となると、これといったものがなかったという。

中学、高校ではバレーボールに夢中になり日々練習に明け暮れた。高校生になると進路についても考えるようになり、体育教師を志して体育系の大学に進むか、車やバイクのデザインに興味があったため工業系の大学のデザイン学科に進むか悩んだ。結論が出ないまま様々な紆余曲折を経て、最終的にはデザイン学科のある大学に入学した。

大学入学後もプロダクトデザイナーへの思いは変わらなかったが、1年次にガラスの授業を受けた際、レポートの課題が出され、その資料を探しに図書室へ。そこで目に付いたルネ・ラリックの作品集を開いた瞬間、「これ、ガラスなんだ!!!」と言葉では言い表せない衝撃を受けた。ガラスの作品と言えば、グラスや花器などのイメージしかなかったが、女性をモチーフにした彫刻的な作品やそれまで見たことのないガラス作品がそこにはあった。「ガラスに対する認識を大きく覆され、ガラスという素材の魅力や可能性を強く感じ、その瞬間、『ガラスだ!!』とガラスの道を志すことを決めました。まさに雷にでも打たれたかのような感覚で、今でもはっきり覚えています」。

2年次にガラスコースを選択し、ガラスの様々な作品・技法を本格的に学んでいく中で、ガラスへの興味はさらに深まっていった。「特に印象深かったのは板ガラスを用いた作品。板ガラス特有の緑がかった奥行きのある透明感に魅了され、当初は『こういう作品をつくりたい』と思っていました」。

一方で、吹きガラスは「暑くてきつい」というイメージから全く興味がなかったが、吹きガラスの授業が始まると思いのほか楽しく、次第にのめり込むようになり、負けず嫌いな性格もあって、「とにかく上手くなりたい」という気持ちに火が着いた。ただ、溶けたガラスを扱うことは非常に難しく、思い通りに行かないことも多く、少しでも上手くなりたいという一心で学外の吹きガラス教室にも通うようになり、その一つが世界的に活躍するガラス作家・山野宏氏の工房「エズラグラススタジオ」だった。工房では、吹きガラスの技術を学びつつ、作品制作の手伝いなどもさせてもらえるようになり、在学中から週のほとんどを工房で過ごすようになった。大学卒業後は正式にスタッフとして働き始め、山野さんの作品の制作のアシスタントだけではなく、海外での活動にも同行でき、様々な経験を積み技術も身についていった。

週に1日、自主制作の時間があったが、いざ自分の作品となると、〈何をつくりたいのか〉、〈何を表現したいのか〉がわからなくなり、自身の作家としての方向は見出せずにいた。「学生時代から技術の習得ばかりを考え、作家としての方向性や作風などについて考えてこなかったことに改めて気づき、その考えがいかに浅はかだったかと、少なからず後悔もしました。『山野さんのような国内外で活躍する作家になりたい』、『公募展で入賞するような作品を作りたい』と具体的な目標はあるものの、そこに至らない現実とのギャップに思い悩み、作家としての将来を不安に思うことも」。それでも自分を信じ、ひたすらに作家としての方向性を模索し続けたという。そうして行き着いたのが「オーバーレイ」という外被せの技法で色ガラスの層をつくり、研磨によって作品として仕上げる作風だった。

2004年、現代ガラスの公募展で優秀賞を受賞。ようやく暗闇に一筋の光を見えた気がしたという。2009年の同公募展で大賞を受賞。「大学卒業から10年以上、ようやく作家としての方向性を確立でき、目標の一つを達成できた喜び、ガラスを続けてきたことに対しての安堵の気持ちでいっぱいになりました」。

海外、富山、そして島根へ

「いつかは海外で」という強い思いをずっと抱いていた川邉さん。なかなか機会に恵まれずにいた中、以前より面識のあったオーストラリア人のガラス作家、ベン・イードルス氏から「私の工房で手伝いをしないか」という誘いを受け「ついに得たチャンスだ」と迷うことなく快諾し、オーストラリアへと渡航した。当初2ヶ月間だけの手伝いだったが、川邉さん自身「もっと働きたい」という思いと、ベンさんも「可能なら正式にスタッフとして雇いたい」ということで、帰国後、就労ビザを申請。丸10年務めたエズラグラススタジオを退職し、再度オーストラリアに渡った。

ベンさんは高度な技術を活かした造形作品や花器、またヴェネツィアンテクニックを駆使した繊細なワイングラスなど、作品は多岐にわたり、世界的に活躍しているガラス作家。制作アシスタントを務める中で、技術的なことはもちろん、作品に対する考え方など多くのことを学び、自身の作品制作にも大きな影響を受けた。またベンさんの工房ではオンとオフの切り替えがはっきりしていて、仕事の時間は集中して打ち込み、時間になったらきっちり終える。そして仕事外では家族や友人の時間を大切にし、趣味を思いっきり楽しむ。ベンさんからはサーフィンやマウンテンバイクなども教わり、ガラス以外のことにも興味を持ったり、楽しむことも大切なんだと思うようになった。「仕事に遊びに、出会った人たちとのことを思うと、このままずっといたいという気持ちでいっぱいでした。ただ、ビザの期限が切れるという現実もあり、後ろ髪を引かれる思いで帰国しました」。

帰国後の活動拠点に選んだのは富山県富山市だった。ガラスの専門学校やガラス工房もあり、「ガラスの街 TOYAMA」を掲げる世界的に有名な富山。「いつかは富山でガラスに携わってみたいと常々思っていました」。「富山ガラス造形研究所」では、アメリカ人の吹きガラス講師の助手として、授業の通訳や技術指導、事務仕事などに従事した。3年の任期終了後は、隣接する「富山ガラス工房」で工房スタッフとして設備の維持管理、工房作品の制作などに3年間従事し、計6年を富山で過ごした。「設備面をはじめ富山はガラス作家にとって、この上なく恵まれた環境だと思います。ただ、恵まれすぎている環境が故に、どこか生ぬるさも感じていて、富山にとどまるという選択には至りませんでした」。

富山の次の拠点として、ともにガラス作家である妻・かわなべかおりさん(45P)の地元出雲で物件を探し、約2ヶ月の準備期間を経て、2016年、出雲市斐川町出西に「ガラス工房Izumo」をオープンした。ギャラリー・ショップも兼ねた工房では接客など作家として以外のスキルも必要とされ、当初は作家として以上に工房運営への不安が大きく「ただやるしかない」という思いで頑張ったという。それでも「多くの人の助けや『縁』にも恵まれ、少しずつ軌道に乗り、今ではこの工房こそが活動の拠点であり、妻と2人、すっかり一国一城の主になれたかと思います」。

「現代ガラス」から「伝統工芸展」へ

工房も軌道に乗り、作家として活動をする余裕も増えてきた中、知り合いの工芸作家から「『日本伝統工芸中国支部展』に出展してみないか」という誘いを受けた。「伝統工芸展」の名前こそ知ってはいたが、自身は「現代ガラス」の作家であり、「伝統工芸展」は方向性の違う畑違いの分野だと思い込んでいたため、出展しようと思うことはなかった。

しかし、これまで「現代ガラス」において高評価を得てきた自身の作品が「伝統工芸展」では「どのような評価を受けるのか」興味が湧き、とりあえずという気持ちで出展してみることに。軽い気持ちの出展だったが、結果は思いもよらず入賞。「もしかして、『伝統工芸展』でも高評価を得られるのか…?」と、その数ヶ月後「伝統工芸諸工芸展」にも出展をしてみると、そこでも入賞。そこで改めて「伝統工芸展」でも高い評価を得られるものだと思えるようになったという。ただ、その次に出展した「日本伝統工芸展」本展ではあえなく選外に。「逆にこの選外を機に、『現代ガラス』『伝統工芸展』について自分なり考え、『ガラス』という素材についても見つめ直す機会となりました」。

「現代ガラス」はアート分野で基本的にはコンセプトに重きを置き、作家の思いやメッセージなどをガラスという素材で表現したもの。制作の過程は重要とされず、必ずしも技法や技術は必要とされない。それに対して「伝統工芸展」におけるガラス作品は、工芸としての作品であり、様々な技法や高度な技術を駆使し、技術を活かした造形であることが重要だと感じているという。「自分なりの解釈を踏まえながら、自分の作品や作風、そして性格などを鑑みると、『現代ガラス』の作品としてよりも『伝統工芸展』の作品として制作する方が自分には向いていると思うようになりました」。

川邉さんは作品に対する視点や意識を変え、制作に取り組む際には、造形としての美しさや技術を駆使するということに重点を置き、制作過程においても、目に見えないような細部にもこだわりや緊張感を持って取り組むようになったという。

ガラスで紡ぐ縁

最後に川邉さんに大切にしていることを聞いてみた。「作品は作って終わりではなく、他者が作品と関わりを持つことで、初めて作品は作品として成立する。私自身も作品を介して他者との関わりを築き、私自身の存在を確立できるものと思っています。ガラスという素材と真摯に向き合い、作品をつくることだけが目的とならぬよう、その先にある人達のこともしっかりと見据えて制作に勤しんでいこうと思います。ガラスとの『縁』、そしてガラスを通しての人との『縁』を大切に、これからもこの地で倦(う)まずたゆまず努力していこうと思います」。

久家明子

Akiko Kuya

革・靴

grandpa YOSHIO/久家靴店
at平田町（平田町出身）

くや・あきこ／1969年、出雲市平田町生まれ。島根県立島根女子短期大学保育科を卒業後、証券会社、保育園、薬局勤務を経て、2002年に一念発起して東京の「モゲ・ワークショップ」、「靴の自作工房hiro」で修業を積む。翌年に独立して「YOSHIO 靴工房（のち靴工房grandpa YOSHIO）」を設立する。2007年に帰郷して出雲市唐川町を拠点とし、2014年、出雲市平田町で久家靴店を継ぐ。オーダーメードシューズ、和紙を使用した鞄など、一人ひとりの生活に永く寄り添ってくれる優しい作品を制作する。

スイッチが突然入り、靴職人に
原点はおじいさん

好奇心旺盛で、とにかく何でもやりたいという子どもだった久家さん。靴屋を営んでいた祖父 良夫さんが大好きで、小さい頃から大きな影響を受けていた。「おじいさんは仕事の合間に身の回りのものを何でもつくってくれる人でした。虫籠をくれると言うからプラスチック製を想像していたら、何かの廃材でちょっとした犬小屋みたいな虫籠をつくってくれたり（笑）。そんなおじいさんの影響もあって基本つくるのは好きでした」。

久家靴店は大正10年（1921）12月8日に創業。久家さんが生まれる前は、靴だけでなく長靴や合羽、手袋などを取り扱う、いわゆるホームセンターのような存在でとても繁盛していた。久家さんの父は勤めに出て、靴店は祖父と母が営んだ。子どもの頃は家が靴屋なのが嫌だったという。「土日も休みじゃないし、家族揃ってどこかへ行くとかもなく、その上お店は安定していない。家中靴だらけで、『靴屋やめてよ』なんて失礼なことを言ったこともあり、それが今自分が靴屋をしているのが不思議ですね。今はやればやるほどリスペクトの思いが強まります」。

高校まで近隣の学校に通い、島根県立島根女子短期大学（現・島根県立大学松江キャンパス）の保育科に進学。子どもは好きだったが、保育士になりたいと思ってはいなかった。卒業後は証券会社に就職したが、1年ほどで退職。その後、保育園で保育士として従事するも、通勤距離と忙しさに体力の限界を感じ、縁あって地元の薬局に転職した。「その薬局の社長は薬剤師ですが、本当は大工になりたかったという人で、いつも一緒に薬棚とかをDIYでつくっていました（笑）。その時、やっぱり私つくるのが好きなんだって気づきました」。

「あなたのおじいさんにずっと靴を修理してもらっていて、20年くらい履いていたよ」。その頃に入っていた油絵サークルの先輩からふいに言われ、20年も履き続けられる祖父の仕事に衝撃を受け、「私、靴つくるわ」というスイッチが入ってしまった。そんな矢先、職場にあった雑誌に載っていた、東京のスクールで靴づくりを習得し、靴教室を開いている女性の記事に目が止まった。すぐに出版社に問い合わせ、記事のスクールが「モゲ・ワークショップ」（主宰 勝見茂氏）だと教えてもらった。そこでモゲ・ワークショップに電話すると、勝見さんから「直接来てみないか」と言われ、その瞬間、「絶対にこのスクールへ行くんだ」と心に決めたという。ところが母は大反対。「経営の大変さを誰より分かっていたし、折角安定したいい職場に恵まれているのに、なぜ今更と…」。なるべく心配をかけないように、節約して資金を貯め、1年で帰るからと約束し、薬局を退職して2002年3月末に上京した。

「モゲ・ワークショップでは、モゲさん（勝見さん）に靴は見せるためのものじゃない、極端にいうと、健康を害するような靴は靴じゃないという考えを叩き込まれました。それは今でも私の頭にずっとあります。「モゲ・イズム」と称した型紙手法で、靴づくりをシステム化して教科書としてまとめられたモゲさんは靴づくりの道標的な存在です」。それでも1年間のカリキュラムでは靴の接着（セメンテッド）しか学べなかったため、手縫い（ハンドソーン製法）を習得したかった久家さんは、それが叶う「靴の自作工房hiro」（代表 斎藤敏廣氏）にも通い出した。「モゲ・ワークショップに通いながら、その帰りにhiroに行くというダブルスクールのような感じで技術を学んでいきました」。

屋号はおじいさんの名前

卒業後、上京して1年半経った頃に、「YOSHIO靴工房」という屋号で独立。靴づくりの原点にある祖父の名前「YOSHIO」を冠した。「靴を届けた時にいろんな人から『男の人だと思っていたよ』と言われていましたけど（笑）。初めの頃は『靴の宅配修理いたします』と手製のビラを配り、依頼が入る度、斎藤

先生に『これはどうすればよいのでしょう?』みたいな相談をいちいちしていました。常連客もでき、経験を重ね、1人でも大丈夫になりました」。一方、自分で考えたベビーシューズの製作も始めた。ホームページを立ち上げたことで、全国からベビーシューズの依頼が入るようになった。「赤ちゃんの足は骨が完成していないので、踵から足首のところをカチッとさせて、真っ直ぐ歩けるようにこだわりました。ホームページでは、そんな自分のこだわりをしっかり訴え、可愛いからと注文くださった方も、つくりが良いとリピートしてくださったりと、少しずつ広がっていきました」。

練馬の喫茶店で個展を開催し、それをキッカケに、銀座で開催された「10人の女性靴職人展」（2005年）に参加するなど活動を広げる中で確かな手応えを感じていった。しばらくは別の仕事もしていたが、忙しくなり徐々に減らしていった。

その頃には7畳ロフト付アパートが、靴づくり用の機材や材料で埋め尽くされ、寝返りもできない状態に。「ここでは良いものづくりができない」とうすうす感じ始めたある時、知り合いの靴作家の個展を見に栃木県益子町を訪れた。そこは温かい人たちばかりで、土地の空気も心地よく、「つくるって広くてこういう雰囲気のとこだわ」と思った。益子で出会った人にも「こっちに移ってきなよ」と言われ、移住に心が揺らいだが、東京の7畳一間に帰った時に、ふと島根のことを思い出した。「目をつぶったら、ぱっと昔遊んだ親戚の唐川の茶工場から見える山の光景が思い浮かんだんです。叔父が亡くなって数年経っていたので、すぐ、従兄に電話して茶工場跡はどうなっているか聞いたら、『なんぼでも好きに使え』って言ってくれて」。「すぐに帰ります」と帰郷を決めた。1年で帰ると約束してから、実に上京5年目のこと。母からは嘘つき呼ばわりされていたが、この急展開には逆に「何で?」という反応だった。2007年、出雲市唐川町へ拠点を移し、屋号を「靴工房 grandpa YOSHIO」に改名した。

「唐川では、自然の中で自分の時間に集中してものづくりができてたなぁと。でも茶工場跡は極端に広すぎて、2年くらいで同じ唐川町内に引っ越し、ずっとそこを拠点にしていました」。2008年、東京と唐川で個展を開催し、グループ展にも精力的に参加。製作に没頭した。

2014年、父の介護のため平田町に戻り、母から久家靴店を引き継ぐと、地元の演劇公演の舞台用靴をオーダーされ、製作で参画したり、平田の民俗芸術「一式飾り」で靴一式《古代王の

沓（くつ）》を町内の人たちと一緒に製作するなど、地域とも積極的に関わっていった。

靴は歩く道具

靴がメインではあるが、開業当初から靴以外の革製品もつくっている。ベビーシューズの販売には母子手帳カバーや写真立てを付け添えた。小さな破革が捨てられずつくった道具ケースや鉛筆カバーはスクール時代からつくり続けている。どの製品にも屋号が焼印されている。「一人のメーカーとしての証であり、おじいさんへの尊敬や誇りの思いを込めています」。

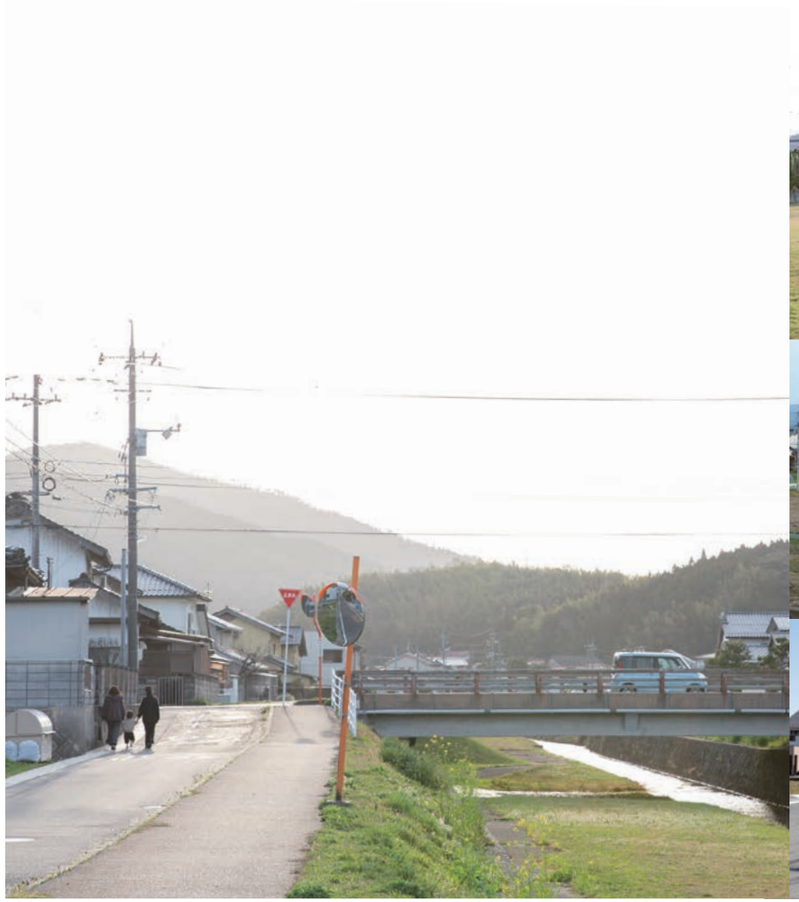
オーダーを受けるにあたり、履く人の生活スタイルが重要な要素となるため、靴を求める理由などざっくばらんにヒアリングをしてから製作に入る。「人が歩く道具として使えるかどうかを大切に考えています。特にオーダーをされる方は、既製品が合わない方が多く、自分なりの解を見出してから、製作に入ります。人それぞれ顔が違うように、足もそれぞれ、左右でも全然違う。これまで何百足とおつくりしてきましたが、その度に発見や気づきがあり、先人の靴職人の知恵に感動したり、学びの毎日です。時には失敗することもあるし、クレームをいただくことも。でも、それも含めてすべてが財産だと思っています」。

店は宝物

様々な材料と道具を使い、200以上の工程を経てできあがる手づくりの靴。それだけたくさんの要素を持ってるものを自分一人の膝の上でできる手の内の仕事。それが一番の醍醐味だと感じているという。「一枚の革だったものが靴という立体になって私の手から産まれる度にワクワクします。『産まれた!』って感じ(笑)。時代の変化にも順応して、目の前の人、一人に集中して、ひとつずつ丁寧に積み重ねて、細く長くやっていくだけですね。つくった靴を通して、使う前よりも暮らしやすくなればとこの小さな仕事に精一杯の思い、心を込めてつくります。やりがいがありますし、生きがいです」。

久家靴店は創業100周年を超える。「もうお店が宝物なんですよ。祖父が靴屋をやっていたから、私が今こうしているので、すごい宝物をくれたんだなぁと思います。自分がすごくやりたいと思えることに出会えたことはラッキーでした。もう何もいらないってくらい。『くつや』としてやり続けて、周りから応援してもらい、今では自分の幹が太くなってきた気がします。私は職人でも作家でもなく久家靴店の久家明子でいたいです」。

平田に作家が集まる理由は？



古くから根付いている方の暮らしを尊重しながら、その時代に即して必要なものを創出していく動きがぼこぼこある気がするんですよ。何かやってみたい人たちがやりやすい場所ではあるのかな。受け入れてくれる空気感もあるんですかね。（吾郷）

わかんない。なるべくしてなった訳じゃなくて、いろんな偶然だと思うんですけど。古くから木綿街道って、木綿の集散地として栄えた歴史があるでしょ。だから素材やものづくりへの制約とかいろんなことのハードルが低い地域だったのかな。（ヒノ）

作家として活動していく上で、制作などのためのスペースが必要。平田では場所の確保などがしやすいんじゃないかな。（川邉）

僕の理由としては、大きな音が出せるとか、火が使えるとか。急にネジなどが必要になった時のために、近くにホームセンターがあるのは必須条件でした。濃くてすごい人達が近くにいることは、本当に人生のチャンス。自然に集まっているのは理想的ですよね。（石川）

僕たちは、そう街中でできる商売じゃないので、人が集まる感じで、ある程度静かで、松江にも出雲にも行けて、ちょっと独立した感じがあってってなると、やっぱ平田ってなるんじゃないかな。ちょうどいいですね。（原）

自然が残っていて、空気がきれいなところ。つくる人には絶対に必要。そういうのでリフレッシュして、創作をするんじゃないかな。商業都市の名残があって、小売りのお店や職人さんもたくさんいて。人との付き合いが近いですね。（久家）

後から考えると何か、松江でもない、大社でもない、中間ら辺がなんかちょうどいい感じはすごくある。同じような気持ちの人が集まってきてるのかな。（田部井）

友人や仲間がいるので、人との繋がりは強いなと思います。心強さがありますね。頑張ったら頑張っただけ評価をしてくれます。（かわなべ）

創作する上で静かな場所なので集中できるんじゃないですかね。自然があるんだけど、奥過ぎず、都会過ぎず、お店も近くにあるし、ちょうどいいというか。ある程度のスペースがあった上で、多少雪も降り四季を感じられる。（安食）

制作活動するにも、生活するにも“ほどよいところ”だと思います。自然が豊かでインスピレーション受ける方も多いんじゃないかな。（樋野）

そんな感覚はないんですけど。結局、個々が強くなり頑張っていくと、町全体が盛り上がってよくなるんだと思います。（岩佐）

偶然だとは思うんですけど、前からやってる人たちがそのきっかけになってる部分は正直あるのかなって。人が人に引き寄せられて集まってるのはあるのかもしれない。でもやっぱり作家ってクセのある人たちばっかりじゃないですか。それを受け入れる寛容さがあるんじゃないですかね、平田には。（伊藤）

［編集後記］「平田ゆかりのクラフト作家の作品を美術的な価値を持つ芸術作品として紹介し、技術力の高さや作品にかける想いを伝えられる魅力的な展覧会にしよう」と、橋本孝前館長と二人三脚で企画を進めてきた。そこで出会ったのが、独自の感性と視点、美意識と高い技術を持つ12名の作家である。最初は記憶に残るアイコニックな作品に魅了されたが、情熱と誠実さを持つ人柄に惹かれるのに、そう時間はかからなかった。本誌の作成にあたり、作家が辿ってきた道を伺い、「経験」という２文字では片づけられないほど、理想と現実の間を揺れ動きながら、「ものづくりで生きる」という厳しい世界で独自の道を切り拓いてきた半生に衝撃を受けた。変化の激しい社会状況にあって、心の奥底の感情を見つけ、自らの生きる意味を追い求め、弛まぬ努力で表現を突き詰め続けた結果が今につながっていることに。だからこそ、その作品から作家の本質が結晶化したような美しさを感じることができるのであろう。キャリアを積み重ねてきた成熟が強く感じられるとともに、いつまでも瑞々しい衝動に満ちた作家12名の現在地を編むことができたのは、何より担当学芸員冥利に尽きる喜びとなった。（平田本陣記念館 学芸員 藤原雄高）

HIRATA CRAFT MUSEUM

平田のクラフト界を担う
若手作家たち

2024年6月22日 発行

企　画　平田本陣記念館
（公益財団法人 出雲市芸術文化振興財団）
島根県出雲市平田町515 tel.0853-62-5090

発　行　出雲市商工振興部産業政策課
島根県出雲市今市町70 tel.0853-21-6549

執筆・編集　藤原雄高（平田町勤務）平田本陣記念館
撮影　川瀬一絵（小津町相代出身）
デザイン・編集　安田陽子（平田町在住）あしたの為のDesign
アシスタント　南木かおり（十六島町出身、平田町在住）あしたの為のDesign
撮影アシスト　鹿嶽さやか（小津町相代出身）
印刷・製本　武永印刷株式会社
（担当：山岡一　小伊津町出身、平田町在住）

Special thanks
平田商工会議所、一般社団法人木綿街道振興会、なかお商会
川瀬家、田中家、撮影にご協力いただいた平田のみなさん

※本誌の情報は2024年6月までに取材したものです。発行後、データなどが変更になっている場合もありますので、あらかじめご了承ください。
本誌の全部または一部を無断に転載・複製することを禁じます。